

インドネシア・中部フローレスにおける 未婚の女性首長をめぐる比較研究

—オーストロネシア研究の視点から—

杉 島 敬 志 *

A Comparative Study of “Unmarried” Female Chiefs in Central Flores, Indonesia: An Austronesian Perspective

SUGISHIMA Takashi*

This paper is a comparative study of indigenous polities and their origin myths in the Lionese-speaking area of central Flores, eastern Indonesia, to explore the Austronesian context in which an “unmarried” sister of the supreme chief assumes the status of female chief in Lise Tana Telu, the largest Lionese chiefdom. Although not all chiefdoms have such a female chief, it is widely recognized that the primordial cross-sex sibling bond in mythical, ritual and other forms functions as the source of life at the level of indigenous polity. On the other hand, in the domain of kinship, the same kind of source is posited not in the bond of cross-sex siblings but in that of the maternal and patrilineal progenitors. The primordial cross-sex siblingship at the polity level takes multiple and divergent forms in the Lionese-speaking area. By comparing these, it is concluded that the relationship between the female chief and the supreme chief in Lise Tana Telu is one of the realization forms. This paper is the first part of a comparative study, and its sequel extends the scope to encompass Austronesian peoples in Formosa, the central part of insular Southeast Asia, western Polynesia and elsewhere in order to refine the typologies developed concerning primordial siblingship in this paper.

は じ め に

オーストロネシア諸族の政体や親族について書かれた民族誌は膨大な数があり、それらを読みこなして比較をおこない、一定の成果を得ることは不可能に近い。しかし、フィールド調査で集めた資料を出発点とし、それと類似する事象を広くオーストロネシア諸族の民族誌のなか

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

2016年3月24日受付, 2016年10月21日受理

に探することは可能である。この作業には「同語源語」を探すこと以上の意義がある。人類学者は、調査地の人々の語る説明を総合しただけでは、どう理解すればよいかわからない事象にしばしば直面するが、それについて論拠ある解釈を導き出すうえで、比較研究は役立つ場合が多いからである。本稿でおこなう比較研究の出発点は、インドネシアのフローレス島中部（以下「中部フローレス」）のリセ首長国（次節で詳述）に1人いる未婚の女性首長ハゴワウォhago wawoである。

本稿は、この女性首長を出発点とする比較研究の第1部にあたり、中部フローレスのリオ語(sara Lio)が話される地域内での比較をおこなう。本稿の続編では比較研究の範囲を、台湾のオーストロネシア系在来民、ポリネシア、東南アジア島嶼中部などに広げる。しかし、いずれもそのごく一部である。

この比較研究では政体と親族を区別することが重要な役割を果たす。植民地支配を受ける以前から、オーストロネシア諸族の生活の大半は自生的な在来政体との関連で営まれていた。こうした政体は、跡形もなく消滅してしまった場合もあるが、中部フローレスにおけるように、国民国家の行政単位と並存し、現在にいたるまで地域住民の生活に大きな影響をおよぼしていることもある。

政体の仕組みの大部分について人々は親族の言葉で語る。そのため両者を一体のものとして扱うことは当然のことにように思われ、実際そのように論じられてきた。

馬淵東一は台湾のオーストロネシア系在来民の研究から出発し、オーストロネシア諸族の民族誌を渉獵するなかで、母の兄弟が霊的に優位するか、父の姉妹（あるいは自分の姉妹）が霊的に優越するかによって、前者をインドネシア型、後者をオセアニア型として分類するタイポロジーを提唱した[馬淵東一1974]。このタイポロジーは、1980年代まで国内外の多くの論文で肯定的に引用されていた。馬淵は、この親族の類型論において、琉球王の姉妹が就任する聞得大君やポリネシア・トンガ島の神聖王の姉妹が就任する女性首長といった政体に関わる地位にもしばしば言及している。このことは馬淵の比較研究のなかで親族と政体が区別なく論じられていたことを示している。

同様の批判はジェームズ・J・フォックスを中心におこなわれた「比較オーストロネシア研究プロジェクト」(Comparative Austronesian Project)についてもいえる。¹⁾ このプロジェクトでは「起源」(origin)と「序列」(precedence)が大きくとりあげられた。「起源」とはオーストロネシア諸族に広く共有されている考えであり、人々の生活を根底的に成り立たせている命の源のことを指す。

オーストロネシア諸族の比較研究を、こうした起源に着目しておこなうことは有効であり、

1) 比較オーストロネシア研究プロジェクトは学際的だったので、正確には、このプロジェクトの一環としておこなわれた人類学的な比較研究というべきだろう。

大きな意義がある。後述の「因果根」の概念²⁾は、オーストロネシア諸語の語彙としては、この起源と重なり合う。ただし、序列の概念にはいくつかの問題がある。そのひとつは杉島[2014]でのべたが、本稿との関連では次のことを指摘できる。

序列は、多くの辞書でなされる座順による語義の説明が示すように、人や集団を順位づける法的・慣習的な秩序のことである。筆者の知るかぎり、比較オーストロネシア研究プロジェクトのなかで提起された序列の概念は、この辞書的な意味とかけ離れたものではなく、人や集団の序列化の意味で使われている[Fox 1995: 33, 1996: 131]。

序列は何らかの基準によって成立する。たとえば、日本の年功序列のもとでは、年齢や勤続年数によって地位や賃金の上下だけでなく、職場や会合で座る場所も決まってくる。比較オーストロネシア研究プロジェクトにおける序列の場合、その基準は起源への近接の度合いである。

比較オーストロネシア研究プロジェクトにおいて、序列は、しばしば①のような記号列で示される[Fox 1995]。上にのべた序列の語義から明らかなように、aやbの位置には人や集団が入る。また、「>」はaがbに優位する非対称的な関係を示し、「/」は「aであると同時にbでもある」をあらわす。後ほどのべるように、多くのオーストロネシア諸語で「起源」は植物隠喩の「根本」、それを命の源とする存在は「枝先」と表現される。それを①に代入すると、②のような系列ができる。

① $a > b/a > b/a > b$

② 根本 > 枝先/根本 > 枝先/根本 > 枝先

このように、序列は反復する非対称的な関係の連鎖を生み出す[Fox 1994: 98, 1995: 32-33]。そうであるなら、序列は、起源からの遠近によって社会的存在が一元的に配列されている状態を描き出す概念であり、そこには政体と親族を区別する発想が欠けているのである。

これらの例が示すように、オーストロネシア諸族の比較研究では政体と親族を区別することの重要性が認識されてこなかった[たとえばSahlins 1958; Goldman 1970; Ortner 1981]。近年再び注目されるようになったサーリンズの外来王(ストレンジャー・キング)論においても、親族と政体との同一性が冒頭から明言されており[Sahlins 2008, 参照Sahlins 1981]、上にのべた評言が過去のものではないことを示している。

2) 杉島[2014]では、因果網、因果支配、因果秩序の概念を使って論述を展開した。本稿で用いる因果根の概念は、それらと密接な関わりがある。だが、後述するように、政体の内部では、そこでの生活を因果的に成り立たせている首長は誰であるかが、政治的に大きな関心事になっている。このことを因果網、因果支配、因果秩序といった面的な概念では十分に表現できない。そのために本稿では因果支配を行使する特定の首長に焦点をあてることのできる因果根の概念を用いる。

本論の構成は次のとおりである。第 1 節では、中部フローレスのリオ語を話す人々の生活の全般を俯瞰しながら、筆者が 1983 年から調査をつづけてきたリセ首長国 (Lise Tana Telu) の未婚の女性首長についてのべる。

第 2～6 節では、リセと比較する観点から、兄弟姉妹の關係に注意を払いながら、中部フローレスの他の首長国の起源神話と首長の構成を概観する。

そして、最終部では、民族誌的データを補足しながら政体と親族を区別することの重要性を再確認するとともに、ハゴワウォについて筆者の最終的な見解をのべる。

本論に進む前に本稿の目的を明確にしておきたい。すでにのべたように政体は親族の言葉で語られる。しかし、親族の領域では結婚によって分離されるべき兄弟姉妹の關係が、政体では未分離な状態におかれ、そこに政体の起源や中心を求める現象が例外とは思えないほど広くみられる。これは中部フローレスにかぎらず、オーストロネシア諸族に敷衍していえることである。本稿は、その多様な姿を、中部フローレスを中心に、しかし、オーストロネシア諸族の比較研究を念頭におきながら描き出す試みである。その発端は次のことにある。

中部フローレスでの調査をつづけ、オーストロネシア諸族の文献を読み進めるうちに、親族と政体を区別し、前者のなかでは例外的なものとして位置づけざるをえない未分離な兄弟姉妹を後者のなかに定位させることで、多様ではあるが、政体の起源や中心と関連するひとまとまりの事象として理解できる事例が数多くあることを意識するようになった。この思いは、フローレス島から遠く離れた地域で、未婚の女性首長や婿入り婚をおこなった女性首長の兄弟が政体における最高位の首長になる等の、後述する中部フローレスの事例とよく似た事象を知るにつけ強くなった [たとえば Beaglehole and Beaglehole 1938; Firth 1963, 1967; Gifford 1929]。また、この比較研究を進めるなかで、親族と政体を区別してこなかったオーストロネシア諸族の比較研究や、人間の生活を単純で一元的な原理に還元しがちな人類学研究を批判的に考えるようにもなった。こうした考察の一端は上にのべた [杉島 2014 参照]。

フローレスの面積は 14,300 km² であり、四国 (18,800 km²) よりひとまわり小さい。リオ語が話される地域は東西 60 km、南北 40 km の範囲におさまるので (図 1 参照), ³⁾ リオ語が話される地域はフローレス島の 6 分の 1 ほどである。この地域は 2 つの行政県にまたがっている。⁴⁾ リオ語の話者 (以下「リオ人」と略称) は 1980 年代には 15 万人程度だった [Wurm

3) 2000 年代から徐々に整備されてきた村道をバイクで走り、日帰りで数十キロ離れた村を訪問する広域調査が最近になってようやく可能になった。しかし、かつては直線距離で 40 km の徒歩旅行をおこなうのに、筆者の場合、5 日～1 週間かった。

4) 図 1 の言語境界は、リオ語の東の境界線の南半分をのぞき、Wurm and Hattori [1981-1983] に従う。また、行政単位の境界は次の地図による。Peta Rupabumi Digital Indonesia (1: 25,000), 1998-2001, BAKOSURTANAL, Bogor, Indonesia.

なお、リオ語の表記は基本的には中部フローレスで流通している方式に従う。ただし、声門閉鎖音を表すアポストロフィーを付け加える。また、固有名詞をのぞき、e と é を区別する。

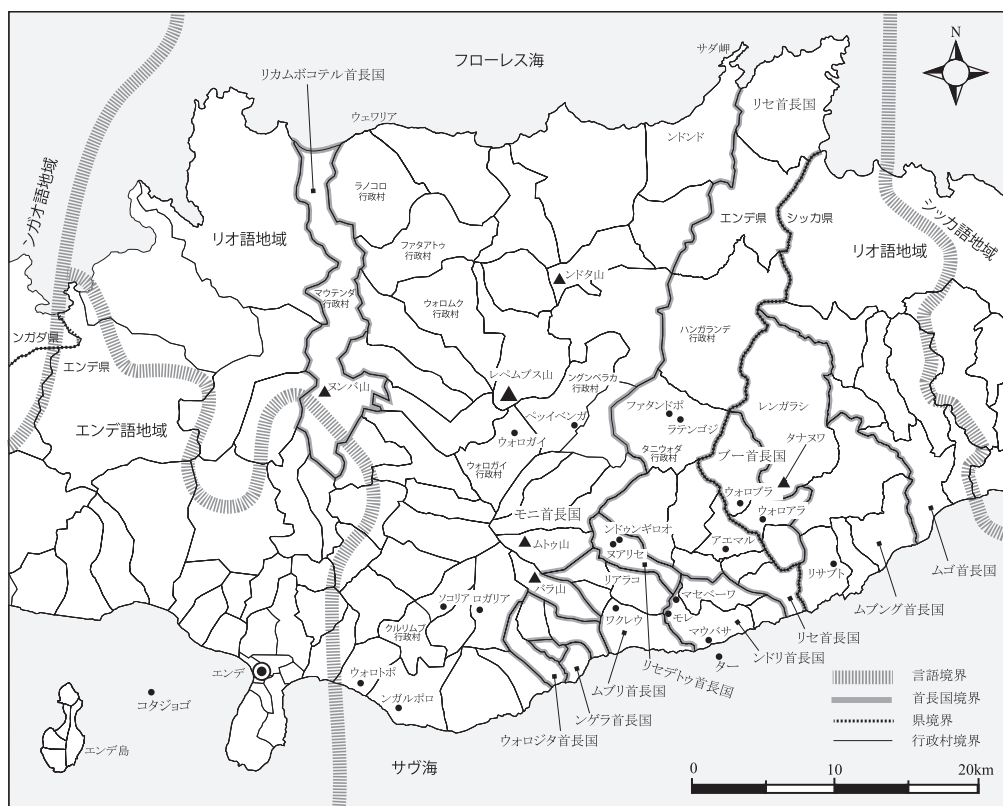


図1 中部フローレス

and Hattori eds. 1981-1983]. 人口増加を勧案すると，現在では20万人に近づいているだろう。

この地域に住む人々の生業は陸稲を主作物とする焼畑耕作である。現在ではチョウジやカカオ等の商品作物の栽培や海外をふくむ域外就労が大きな現金収入源となっている。

リオ人のフルネームは個人名と個人名に後置される父の名前からなる。たとえば、ケワという女性の父がウォダである場合、女性のフルネームはケワ・ウォダとなる。中黒をはさむカタカナ書きの長い名前が続く文章は読みにくい。そのため、以下では適宜フルネームを使ったり、個人名だけを用いたりする。

1. リセ首長国

中部フローレスはタナ tana（土地、大地、領地）とよばれる多数の在来政体に区分されている。この政体はオランダ植民地政府やインドネシア共和国の行政単位との関係で変化しながらも、現在にいたるまで地域住民の生活に大きな影響力を保ちつづけている。以下ではこのよ

うな在来政体を「首長国」とよぶ。中部フローレスには多くの首長国があるが、図 1 にはそのほんの一部しか描かれてない。

それぞれの首長国には必ずといっていいほど先住者がいる。ここでいう先住者とは、無主地だった首長国の領地に最初に住みついた者の子孫のことである。リセ首長国で先住者は一般に「降りてきた者」(ata nggoro) とよばれ、後の「功績ある者」(ata godo) と対比される。しかし、他の首長国では、こうした総称はなく、先住者や後来者が固有名でよばれる場合が多いように思われる。⁵⁾「降りてきた者」という表現については第 4 節でのべる。

リセ首長国は、中部フローレスのリオ語が話される地域で、最も大きな首長国である（人口約 17,000 人）。また、リセは先住者がいない点でも特異である。この点についてはすぐ後で説明する。

リセの内部は各種の領地に区分されている。それぞれの領地には男性の首長がおり、その総数は 100 名をこえる。首長の住む村には首長の住居である祭祀家屋 (oné ria あるいは sa'o ria) が建てられており、これが地縁的な父系リネージ (wewa) の本拠地になっている。父系リネージは始祖を同じくする他の父系リネージとともに氏族 (ana あるいは embu) を形成する。これらはいずれも外婚的ではない。厳格に外婚的なのは父系リネージ内のサブリネージ (tuka) である。

リセの成立史は、ウォダ Woda とワンゲ Wangge という兄弟とその息子たちが 20 あまりの首長国を知恵（狡知）と勇気（暴力）によって併合していく過程であり、併合された首長国の先住者は、先住者としての地位を抹消されるか、他地域に逃走していった。これが口承史のなかでリセに先住者がいない理由として語られる説明である。リセでは領地の拡大に成功した者やその子孫が「功績ある者」(ata godo) として高く称揚される。またリセの領地は「功績者の土地」(tana godo) とよばれ、「先住者の土地」(tana nggoro), すなわち先住者のいる首長国と区別される。功績者の典型は、1 人の「根本の首長」(mosa laki pu'u) と 2 人の「偉大な首長」(ria béwa) であり、かれらはウォダとワンゲの父系子孫である。このほかに「母父の首長」(mosa laki iné amé) もいるが、この首長については根本の首長とともに第 4 節でのべる。

以下に続くいくつかのパラグラフは、ハゴワウォ hago wawo という女性首長の説明にいたるまで、リセだけでなく、中部フローレスのリオ語が話される地域の全体についていえることである。

母方交叉イトコの女性（母の兄弟の娘）は男性にとって理想的な結婚相手である（女性にとっては父方交叉イトコの男性）。しかし、母の兄弟の娘との結婚を世代ごとに繰り返すこと

5) インドネシア語の「先住民」(orang asli) という言葉の使用が一般化し、「降りてきた者」が「先住民」とよばれるようになってきた。

で、出自集団を連帯させる社会装置として母方交叉イトコ婚をイメージすることは必ずしも正しくない。母の兄弟の娘や、彼女と同じ親族名称でよばれる彼女の近親女性との結婚は過去においても少なかったし、母方交叉イトコと同じカテゴリーに分類される女性の範囲は非常に広いからである。

ただし、親族関係者が与妻者＝妻の与え手 (iné amé, 字義訳：母・父)、自分の集団 (aji ka'é, 字義訳：同性のキョウダイ)、受妻者＝妻の受け手 (ana embu, 字義訳：子・孫) の3つに区分され、その間を女性が一定の方向に婚出しなければならないという規範は広く共有されている。男性にとって母方交叉イトコである女性は「根本の同性のキョウダイ」(aji ka'é pu'u) とよばれる。この名称は母方交叉イトコの女性が「同性のキョウダイ」である自分の集団に婚入してくる規範と整合する。

母の兄弟とその父系祖先は「根本」(pu'u hamu; pu'u：幹, hamu：根) とよばれ、根本は「枝先」(nga'a rada) である姉妹の子の栄枯盛衰を左右するとされる。作物が実るかどうか、仕事が進んでいくかどうか、健康でいられるかどうか、子が生まれるかどうかといった人生の最重要事は、根本が枝先を祝福しているかどうかにかかっており、根本は呪詛の言葉を口にすまでもなく、単に不快に思うだけで、枝先にさまざまな災厄を生じさせる。

こうした関係性の背景にあるのは因果関係と類似する考え方である。リオ語の「根本」には原因や理由の意味があり、理由や原因をたずねる際、「その根本は何か？」(“Pu'u kai apa?”) という表現がよく使われる。根本が枝先の吉凶禍福を左右できるのは前者が後者の原因と考えられていることによる。こうした人の生活を成り立たせる原因者を以下では「因果根」(causal trunk) とよぶ。⁶⁾

中部フローレスにおいて、母の兄弟は姉妹の子の栄枯盛衰に大きな影響をおよぼす主な因果根だが、唯一のものではない。無限に連鎖する因果関係と同じように、人生の吉凶禍福に関わる因果根は多岐にわたる。そのため、不幸に苦しむ者、見知らぬ老人を夢で見た者、大きな成功を求める者は、どの祭祀家屋、あるいは、どの祖先の墓で供犠をおこなうべきかを、呪医に占ってもらふ。その結果、母の兄弟の家で供犠をおこなう頻度は高いが、それに劣らず、自分の父系祖先やウォダのような英雄的祖先に供犠をおこなうようになることも多い。また、与妻者の与妻者に供犠をおこなうことや、供犠動物（多くは豚）の肝臓に現れる予兆を呪医が読み取り、思いもしなかった因果根への供犠を指示することもある。⁷⁾

6) メラネシアやポリネシアで「根本」が植物の根本だけでなく、起源、理由、原因を意味することは古くから人類学者の間で注目されてきた[たとえばHocart 1915; Ivens 1931]。ここでの筆者の論点は「根本」という言葉の使用の背後に因果関係と類似する考えが働いていることである。因果根の概念との関連で、馬淵東一[1974]のいう「霊的優越」の概念も再考すべきだが、機会をあらためる。

7) 筆者の調査村の祭祀家屋で供犠は、1980年代には年に数回おこなわれるだけだったが、現在では20回ほどおこなわれるようになった。供犠増加の背景にはさまざまな要因がある。

父系集団から「婚出した女性」(ana wa'u; ana : 子, wa'u : 出る, 降りる)が自分の父系祖先の祭祀に関わることはタブーである。たとえ自分の子が自分の実家で供犠をおこなう場合でも、祖先への供物を料理することはできない。このタブーは次にのべる「未婚」の女性首長のポジションと対照的である。

リセ首長国の首長は一般に男性だが、ハゴワウォ hago wawo という地位名の女性首長が新しい耕作年度の播種前におこなわれるポオ po'o という大きな儀礼に登場する。ハゴワウォの起源は次のように語られる。

(前出の) ワンゲとともにリセ首長国の領地を急速に拡大したウォダには、長女のケワ Kewa, 長男のタニ Tani, 次男のセンダ Senda, 三男のドシ Dosi という4人の子どもがいた。ウォダはかれら全てを大首長にするつもりだった。だが、ウォダは、それを実現させる前に他界し、ケワはドシとともに暮らしていた。ドシは、リセの領地のさらなる拡大のために戦争をおこなったが、この戦争で味方の軍勢に多くの死者が出た。ドシはその代償 (pati toko) を金の装飾品で支払わなければならなかったが、それができなかった。戦死者の代償を求めて、ある日、30人の男がドシのところに押しかけてきた。ドシは窮地におちいった。そこで、ドシの未婚の姉妹ケワは、その夜30人の男たち全てと性交渉をもった。そして、翌朝、男たちが再び戦死者の代償を要求しはじめると、ケワはすでに自分の身体で戦死者の代償を支払ってあると言明した。これを恥じて男たちは帰っていった。この功績のために、ケワは女性首長となった。

ハゴワウォは、ポオの儀礼に登場し、主だった耕作者(小首長)からの貢納米を上記の2人の偉大な首長とともに受け取るが、女性首長は偉大な首長よりも先に、目の前に注がれる貢納米の頂の部分を腕で大きくすくい取る。ハゴワウォとは、この行為、賓客がホストからもてなされるときのように、他の者よりも先に山盛りになっている米や飯の頂の部分を自分のために取りわけけることを意味する。

ハゴワウォは、ポオの儀礼で朝から儀礼の終わる夕刻まで、黙して語らず、トイレに立つこともできない。もし耐え切れず、尿をもらせば、雨が降りつづくことの前兆とされ、大便をもらせば、豊作になることの予兆とされる。

この儀礼では貢納米を竹筒で炊いた「雨水の飯」(aré aé uja) が地の神に供えられる。貢納米は種籾の一部を精米したものである。この儀礼が終わった夜、祭場は「天の神と地の神」(Du'a ghéta lulu wula, Ngga'e ghalé wena Tana) が交合する場となる、という説明がまま聞かれる [Sareng Orinbao 1982: 147参照]。

女性首長がポオの儀礼で果たす役割は上にのべたとおりであり、神々への供物を料理した

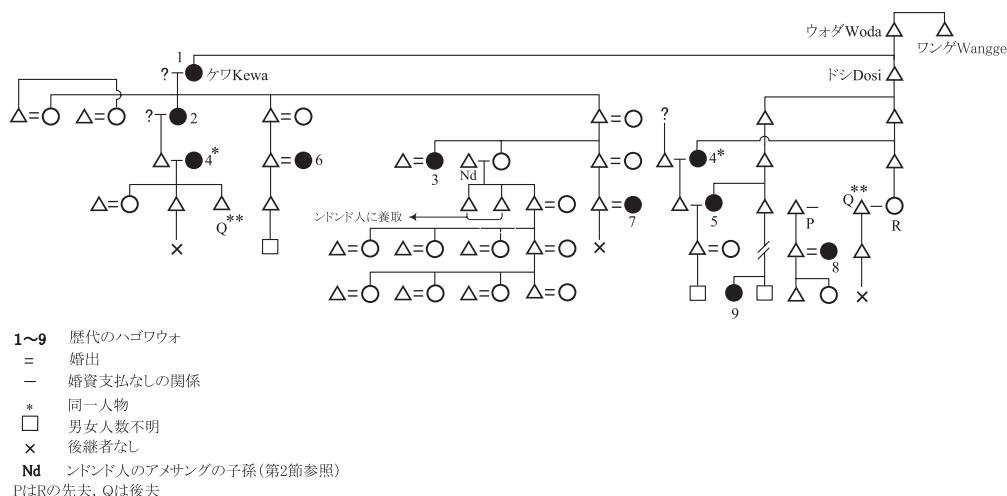


図2 ハゴワオの系譜

り、準備することはない。ただし、ハゴワオは、ポオに続く6日の物忌みの期間中、寝食の場を屋内から、空間分類上、屋外とみなされる家のベランダに移動させる。そして、貢納米を屋外で炊いて食べる。この期間、水浴、梳ること、掃き掃除、食器洗いは全て禁止される。食後、食器は布で軽く拭いて竹床に伏せておかれる。ハゴワオ以外の首長や領民は、これらの禁忌の一部を課されるだけである。したがって、ハゴワオはポオの物忌みを一身に担っているといえるだろう。ハゴワオがこれらの禁忌を犯すと、日照りが続いて作物が全滅したり、暴風雨が作物を流し去ってしまうとされる [杉島 1990: 743-744]。

また、かつてハゴワオは、物忌みの期間に、不特定多数の男をベランダに迎え入れて性的に交わり、後継者を得ていたという伝承がある。このことは「寝ゴザは土、枕は石」(té'e tana lani watu) と表現される。

ポオの物忌み期間中だった1984年の10月3日にウォロマゲ Wolo Mage 村にあるハゴワオの家を訪問し、一晩泊めていただき、いろいろな話をうかがったことがある。このとき、ハゴワオ(図2の第8代ハゴワオ)は夫とともに竹床のベランダを寝食の場としていた。翌朝、ハゴワオの家からの帰途、近くにあるアエマル Ae Malu 村に立ち寄ると、村の男たちから「どうだった、(陰部を)触るぐらいはしてきたか?」(Ngéré emba? Kau ko di iwa?)と散々からかわれた。このことが示すように、ポオの物忌み期間中のハゴワオは性の規範から逸脱した儀礼状態におかれる。⁸⁾

また、初代のハゴワオに就任したケワは、父方平行イトコ(父の兄の息子)であるマリ

8) リセ首長国の住民はほぼ全員カトリックの信者である。しばらく以前からハゴワオには教会婚をおこなった夫がおり、物忌みの期間中もハゴワオと寝食をともにしており、この儀礼状態が実践されることはありえない。

Mali と性関係をもっていたという伝承が、ケワとマリ双方の父系子孫の間で知られている。父方平行イトコとの性関係はインセストであり、禁止されている。⁹⁾ 1984 年 10 月 4 日の朝、ハゴワウォの家からの帰途に立ち寄った村は、偶然、マリの父系子孫の本拠地だった。

ハゴワウォの家に泊めていただいたとき、ケワとその子孫の系譜をなるべく広範囲に教えてもらった(図 2 参照)。しかし、納得できないところがあった。2015 年 9 月 20 日にボオに参加する機会があり、補足調査を試みた。しかし、ハゴワウォの関係者は筆者が 1984 年に記録した系譜の一部しか知らなかった。2015 年の調査で補足できたのは、第 9 代のハゴワウォだけだった。

「母系的」(matrilinal)という言葉を知っているリオ語の話者は、ハゴワウォの地位の継承を母系的と形容する。だが図 2 が示すように、ハゴワウォの地位は必ずしも母系的に継承されてきたわけではない。ハゴワウォの関係者は、自分たちがあたかも独立したリネージであるかのようにケワ・リネージ(Wewa Kewa Woda)とよぶ。だが、その独立性は確立されたものではない。独立したリネージは、その祭祀家屋でムバマ mbama とよばれる飯の共食儀礼をおこなう。しかし、ハゴワウォの関係者は、現在まで初代のハゴワウォになったケワの兄弟ドシの父系子孫からなるドシ・リネージ(Wewa Dosi Woda)の祭祀家屋でおこなわれるムバマに参加している。また、ドシ・リネージ内の各サブリネージはこの儀礼で飯を炊く土器の釜をもっているが、ケワ・リネージにはこの釜もない。

リセ首長国で話されるリオ語はハゴワウォの地位と継承について語る語彙に乏しい。しかし、図 2 を検討すると、ハゴワウォとは、結局のところ、婚出せず、そのために兄弟と分離されなかった、偉大な首長の未婚の姉妹ではないかと思われてくる。そのように考える理由のひとつとは、ハゴワウォの地位を継承する者がいない場合、あるいは、第 3 代ハゴワウォのように、ハゴワウォが婚出した場合、後継者がケワの兄弟であるドシの父系子孫から充当されてきたことにある。¹⁰⁾ また、もうひとつの理由は、一般的にいえることだが、婚資(結納)の支払いがおこなわれないと、たとえ子を産んでも女性は婚出したことにはならず、未婚の母の子は母の父系リネージの二次的成員でありつづけることにある。

通常、子をもたない未婚の姉妹は「枯枝」(ngga'a tu'u)とよばれ、邪魔者扱いされるとまではないわいが、決して称賛されるような存在ではない。彼女たちは父系リネージの祖先祭祀で特定の役割を担うこともない。また未婚の母やその子は近親者にとって大変に不名誉な存在だった。

9) 以下はマリの父系子孫の首長の談話。マリの「ペニスは長く骨があった」(uti béwa, latu no'o toko kai)。性交で女性を突き殺さないよう、マリはペニスの途中にストッパーとして布などを巻き付け、全長を挿入しないようにしていた。マリのペニス骨は、他の骨とともに首長の住む祭祀家屋内の遺骨箱に入っている。

10) ただし、6～8 代のハゴワウォには婚入女性が就任している。カトリックへの入信によるものなのかどうか、もはや知りようがない。

そうであるなら、偉大な首長にハゴワウォという未婚の姉妹がいることや、播種前におこなわれる儀礼ポオの物忌みの期間中にハゴワウォが性の規範から逸脱した儀礼状態におかれることはどのように理解すべきだろうか。

2. ンドリ首長国との比較

ンドリ首長国 (Tana Ndori) はリセ首長国のすぐ南にあり、リセとは競合関係にあった。しかし、口承史が類似することや、方言差がほとんどないことは、古くから幅広い交流がおこなわれてきたことを示している。また、リセとンドリの境界付近の主要村落は継続的に通婚しあってきた。ただし、リセとンドリは、次のような点で大きく異なっている。そのひとつは、ンドリにはハゴワウォのような未婚の女性首長がいないことであり、もうひとつはリセにはいない先住者がンドリにはいることである。

以下は、2015年7月9日にンドリのマウバサ Mau Basa 村の M 氏と O 氏から聞いたンドリの先住者、モレ人 (Ata Mole) と、後來したンドンド人 (Ata Ndondo) をめぐる口承史・起源神話である。なお、M 氏はンドンド人、O 氏はモレ人だった。

モレ Mole (女)、ミリ Miri (男)、バリ Bari (男) は兄弟姉妹だった。モレ、ミリ、バリの子孫は「モレ人」と総称される。

モレ、ミリ、バリの祖先はジャワ島のペロアラ Pero Ara からやってきて、フローレス島南岸のコタジョゴ Kota Jogo に到着した。¹¹⁾ しかし、コタジョゴは洪水¹²⁾ のために海中に没した。この洪水を生きのびたのはモレ、ミリ、バリの3人だけだった。かれらはコタジョゴから東進し、ター村 (Nua Ta) に住んだ。¹³⁾ しかし、犬を人間のように扱う禁忌を犯したために豪雨が降りやまず、再び洪水がおこり、ター村は海に沈んだ。その後、モレ人はケリサンバ Keli Samba 村に移住した。ケリサンバ Keli Samba は山の名前であり、この村はモレ Mole 村 (後述) ともよばれる。

モレの夫は「海の彼方からやってきた男」(ata lau mai) だった。名前は知らない。その男が大首長になったので、周囲から悪口をいわれ、故郷に帰ろうとするとところを縛りつけて返さなかった。その子孫はンドリの大首長でありつづけている。M 氏と O 氏はこの大首長がンドリの最高位の首長のように語る一方で、この大首長が「姉妹の子孫」(ana ura fai) であるもののべていた。通常の文脈で「姉妹の子孫」は、婚資の支払いをとみなわない性交渉から生ま

11) ンドリの Wonda 村のモレ人から聞いた話では、コタジョゴはフローレス南岸のエンデ市とエンデ島の間にあったという (図1参照)。

12) このインタビューでは神話時代におこった洪水のリオ語表現「海が上がり、土地が溶ける」(mesi nuka tana lala) ではなく、日本語由来のインドネシア語「tsunami」が使われていた。

13) 杉島 [1990: 605] ではラウ・ター Lau Ta 村と書いた。間違いではないと思うが、M 氏と O 氏によると、それは今でも海中に見える村の遺跡の名前であり、人が住んでいたときの村の名前ではないという。

れた未婚の（あるいは婚出していない）姉妹の子が兄弟の父系集団の二次的成員になっていることを意味する。したがって、モレの子孫である大首長は、婚出しなかった姉妹の子孫なのであり、この点でリセの女性首長ハゴワウォが偉大な首長に対するのと同様な関係をミリやバリの父系子孫である大首長に対してもっていることになる。

M氏は、ミリやバリの父系子孫も、大首長になっていると考えているようだった。だが誰が就任しているかについては明言しなかった。再訪の際、この点について質問し、現在のモレ人の大首長とされる者から5世代ほどさかのぼる系譜を聞いたが、かれらがモレ、ミリ、バリとどのようにつながっているかは依然として不明だった。モレ人の間でも対立する見解があるとのことだった。

誰から起算するかは不明だが、モレ人の系譜は99世代あり、モレ人は10のリネージ(kadhoあるいはwewa)に区分されているとのことだった。しかし、M氏もO氏も、モレ、ミリ、バリから上の祖先については何も知らなかった。

以下は、2015年7月2日にマセベワ Mase Bewa 村に住むンドンド人のS氏と、筆者の訪問時にS氏が家に呼び集めた人々から聞いたンドリの起源神話の断片である。このときに集まった人々はンドンド人だけだった。マセベワ村にもモレ人は住んでいるが、かれらとの間で一時的な土地紛争がおこっており、モレ人は呼ばれなかった。

S氏たちは、フローレスに到着した最初のモレ人や、到着した場所を知らなかった。かれらはモレ人がター村に住んでいたところから話を始めた。当時のモレ人の領地はフローレス島の全体だった。¹⁴⁾ それゆえ、ンドリはフローレスの全ての首長国の「根本」(pu'u)である。

しかし、ター村で犬の尻尾に熾火をつけて運ばせるという、犬を人間のように扱う禁忌を犯したために、洪水がおこり、ター村は海に沈んだ。洪水を逃れえたのは、モレ、ミリ、バリの兄弟姉妹だった。

モレ(姉妹)はター村からモレ村に移住した。モレの夫の名前は知らない。その子孫は大首長としてモレ村に住んでいる。

モレ村には、中部フローレス内奥のンドタ山(Keli Ndota, 字義: 切り刻みの山)で殺されて作物の種となったモレ人のムブーMbuという女性の出身地でもある。付言しておく、作物の起源神話は秘匿される場合が多く、豊穡をもたらす呪文をふくめ、その詳細を聞き出すことは難しい。筆者の知る最も長いバージョンは1984年にリセ首長国のウォロレレロオ Wolo Lele Lo'o 村に住む首長から聞いたものだが[杉島1990: 605-608]、その首長は、日本占領期に道路建設に従事した際、キャンプで知りあったンドリ人に教えてもらった、といていた。

14) リオ語のももとの表現は、「東はコウェ・ジャワ、西はバジョ・ピマ、頭は雲、尾は暗い海」(ghéta Kowe Jawa, ghalé Bajo Bima, ulu hubu nggubhu, éko mesi mila)である。カタカナ書きした地名は、特定の場所ではなく、漠然と東と西の「遠方」を指す。

リセにおいても殺されて作物の種となった稲の母はンドリの出身であったことが広く知られている。同様のことは、リセデトゥ Lise Detu, ムブリ Mbuli, ングラ Nggela などの南岸の首長国についてもいえる。

S 氏とのインタビューに話を戻すと、モレの兄弟であるミリはサンバ山 (Keli Samba) の山頂に近いウォロフェオ Wolo Feo 村に住んだという。しかしウォロフェオ村は極めて不便な場所だったので、3 世代前に村人はモレ村に移住した。そのため、現在ミリの子孫の大首長もモレ村に住んでいる。S 氏たちはバリの子孫についてはほとんど何も知らなかった。

現在にいたるまで、先住者は自らの起源に関わる知識を秘匿しようとする傾向がある。くわえて、S 氏によると、ミリの父系子孫である大首長は無口で、モレの子孫である大首長は非常に高齢とのことだったので、インタビューにはいかなかった。S 氏は、バリの父系子孫である大首長が妻の兄弟なので、数日後にはインタビューできるように計らうとのことだったが、実現しなかった。2016 年の調査では、雨が降りつづいたのと、他の首長国への訪問等で時間がなくなり、ンドリ首長国では再調査しなかった。

以下は、S 氏と M 氏にほぼ共通する話であり、かつリセでも広く知られているので、両者から聞いた話をまとめたのである。

かつてンドリ首長国の領地で勢力のあったウォンダ人 (Ata Wonda) のプンダ・フワ Punda Huwa とマング氏族 (Ana Mangu) が戦った。この戦いでプンダが殺された。ミリの父系子孫であり、モレ人の大首長だったペバ・ランゴ Peba Ranggo は、姉妹がプンダに嫁いでいたので、マング氏族と戦うことになった。マング氏族は、ペバを討ち果たすために、(現在のシッカ県の中東部に住む) シッカ人 (Ata Kowe Jawa) に助けを求めた。しかし、1 人をのぞいて、シッカ人は全員が死んだ。次に (現在のエンデ県の西部に住む) エンデ人 (Ata Keo Ba'i) に援軍を求めたが、結果は同じだった。ペバはムティンドリ Meti Ndori という剣 (sau) をもっており、そのひとはらいで百人、千人の敵をなぎ倒すことができたからである。

そこでマング氏族は、ペバを殺せば大きな金の装飾品 (Weka Dhoku Tara Bilo)¹⁵⁾ を贈るという約束で、中部フローレスの北海岸のンドンド (図 1 参照) に住む人々に助けを求めた。こうして防護の魔術 (kubhé séla) で身をかためたヌサクラ Nusa Kula, ヌサバブ Nusa Babhu, ヌサプルングレ Nusa Pulu Nggelé の 3 人を首長とする一群のンドンド人がやってきた。この 3 人の首長は「ヌサ三兄弟」(Nusa Telu) と総称される。

この戦いでヌサプルングレの息子のンドンギ Ndongi が先を鋭く尖らせた竹 (wulu) でペバを刺殺した。だが、マング氏族は約束していた金をヌサ三兄弟に支払うことができなかった。そのためにンドンド人はンドリに住むことになった。

15) Weka Dhoku は円盤ないしはゴングの形をした「胸飾り」(gebé) であり、Tara Bilo は「舟」(rajo) 形の胸飾りであるとの説明を聞いたことがあるが、長大なネックレスだったという者もいる。

その何世代か後、ンドングヌサ Ndongi Nusa の子孫であるアメサング Ame Sanggu が、バリの父系子孫であり、モレ人の大首長だったロボロボ Lobo Robo と戦った。この戦争でロボロボはバラ山 (Keli Bara) 近くのとバマテ Toba Mate まで敗走した。バラ山はンドリの領域外にある (図 1 参照)。そのため、7 年間、雨が降らず、凶作が続いた。それでロボロボを呼び戻し、ンドリに住まわせた。ただし、アメサングの時代にンドンド人の勢力が伸張し、「アメが歩くと土は融け、サングの踏むところ岩が砕ける」(Ame mbana tana lala, Sanggu lita watu mbi'a) といって、供犠動物の最上等の部位 (pusu lema) は、モレ人ではなく、ンドンド人の大首長が受け取るようになった。

モレ人は後来のンドンド人に少なくとも 2 回戦争で大敗したが、ンドリから追放されなかった。口承史で語られるその理由は、上記のように、モレ人がいなくなると凶作になり、生活が成り立たなくなることにある。言葉をかえるなら、先住者であるモレ人はンドリ首長国の因果根とみなされているのである。付言しておく、ンドンド人とモレ人の人口比は、8 対 2 あるいは 7 対 3 であり、ンドンド人が圧倒的に多数派である。

先住者がいないはずのリセ首長国においても、凶作が続いたために、併合された首長国から逃げていった住民の一部を呼び戻したという口承史がまま聞かれる。ただし、リセで政体の因果根のような扱いを受けるのは、偉大な首長であり、その身体には地の神が入り込み、彼らが領地の方々を訪問すると、地の神が随行するので豊穡がもたらされるという話が少なくとも 1980 年代まではよく聞かれた。したがって、リセでは先住者ではなく、功績者が政治領域全体の因果根になっているのである。

前節の末尾で、ハゴワウォは偉大な首長の未婚の姉妹として理解することが適当ではないかという仮説を示した。このことはンドリの因果根といえる先住者モレ人の祖先がモレ、ミリ、バリという兄弟姉妹であることと関係があるのだろうか。もし関係があるなら、モレの夫が妻方居住をおこなった入婿の外国人であることが注目される。つまり、モレは婚出しなかったものであり、この点で、前節でのべたハゴワウォと同じになる。また、モレの夫が海の彼方からやってきた外来者であることは、モレの時代、ンドリ首長国の領地がフローレス島の全体だったというマセペーフ村の S 氏の語りと符合する。

こうした政体の因果根と、結婚によって分離されていない兄弟姉妹との重なり合いは偶然のものではないことを本稿では論じていくが、比較を進める前に、このことを示唆する、リセ首長国で聞いた種まきの時期を決める際の星見の起源神話を以下に要約引用する。

種まきの時期が到来したことは、ウヌ Wunu (プレアデス) とワウォトロ Wawo Toro (アンタレス) という星を見て知ることができる。ウヌは、ワウォトロの実の姉妹 (weta dhembu) であり、子どもの頃、かれらはともにフローレス島の東端に住んでいた。その頃、

かれらはいっしょに夜空に現れていた。ところが、あるとき喧嘩になり、ウヌは山刀をワウトロの頭にふりおろし、ワウトロを殺してしまった。こうして、ワウトロはフローレスの西端に住み、ウヌは東端に住むことになった。そのため、大人になったとき、おたがいに顔がわからなくなっていた。

成人したワウトロは、妻となる女性を見つけるためにフローレスの西端から旅に出た。ワウトロは、フローレスの東端で美しい女性と出会って結婚し、初夜の4晩 (kobé sutu) をむかえた。ワウトロは頭がかゆくなり、妻にシラミをとってくれるように頼んだ。妻はシラミとりをはじめたが、驚いて夫をつきはなした。ウヌが見たのは自分がワウトロにおわせた頭の傷跡だった。ウヌとワウトロは、知らぬまに、近親相姦を犯していた (nia mila mata ké'o) のであり、かれらは、このことを恥じ、二度と会うことがないように、再びフローレス島の東端と西端に別れて住むことになった。こうして、ウヌが見えなくなるとワウトロが現れ、ワウトロが現れるとウヌが消えるようになった。

だが、ウヌとワウトロが同時に見えるようになる期間がある。これは種まきをおこなう時期になったことを告げている。

この神話は、始原の男女が夫と妻ではなく、「兄弟」(nara) と「姉妹」(weta) であることや、こうした原初の兄弟姉妹が豊穡と結びついていることを示唆している。

3. ブー首長国をふくむ比較

ブー首長国はリセ南部の東側に隣接している。ブーで話されるリオ語はイントネーションがリセ方言とは異なるが、口頭伝承をはじめとするさまざまな情報を総合すると、ブーとリセは古くから絶えず交流をつづけてきたことがわかる。ブーに女性首長はいない。

2015年8月3日、シッカ県のマウメレ市で教員として働くブー出身のG氏を自宅に訪ねたとき、次のような話を聞いた。

パンデPandeの子である名前の明らかな女(以下「X」と)、その兄弟ワラWara、コロKolo、サペSape、ムボンガMbonggaの子孫は、別々の村に住んでいる。G氏はワラの父系子孫である。ンドリ首長国におけるモレの子孫と同じように、G氏は、Xの子孫を「姉妹の子」(ana ura fai) と表現していた。Xの子孫とワラ、コロ、サペ、ムボンガの父系子孫は、年に一度、Xの子孫である大首長の住むウォロブラWolo Bela村の祭祀家屋に集まってカーウヴィka uwi(ヤムイモを食べる)という儀礼をおこなう。だが、なぜ「姉妹の子」が住む家に集まらなければならないのか納得がいかない。首長の地位は父系的に継承されるべきなのに、ブーでは奇妙なことになっている。G氏はXの夫の名前を知らなかった。

他方、G氏がXの子孫とみなしている大首長のS氏は次のように語っていた(2015年7月

16 日)。タナヌワ Tana Nuwa という場所にブー Bu とウェティ Weti という兄弟姉妹が漂着した。ブーは兄弟、ウェティはその姉妹である。あたりは海に覆われており、タナヌワだけが海面から出ている。飲み水がなかったので、かれらはサトウヤシの樹液が発酵した酒を飲んだ。かれらは、酔ってしまい、兄弟姉妹であるにもかかわらず性的に交わった。

ブーとウェティの間にリセ Lise, ムブング Mbengu, ロケ Loke, ベグ Begu という 4 人の子が生まれ、そのそれぞれに土地が分配された。リセにはリセ方面、ムブングにはムブング方面、ロケにはレンガラシ Rengga Rasi (ムブング Mbengu 首長国の北部)、ベグにはリサブト Lisa Bheto (現在ではムブング首長国の一部をなす) の土地が分配された。分配された土地の名はそれぞれ大小さまざまな首長国あるいは首長国の一部の名前である。これらに対して、ブー首長国は「幹の土、石の根」(tana pu'u watu hamu), すなわち「根本」になっている、と S 氏はのべていた。

この根本であるブーに誰が住んだのかを S 氏が語らないので、この点について質問すると、返答は次のようだった。ブーに住んだのはパンデ Pande である。パンデは、S 氏の 10 世代前の父系祖先である。その始祖はポルトガル・マラカ Portugis Malaka からやってきて、中部フローレス北岸のウェワリア Wewa Ria に到着した。その後、子孫は、リセのデトゥラテ Detu Late (実在の村名)、タナヌワへと移動を繰り返し、パンデが現在のウォロブラ村に住むようになったという。また、具体的な名前はあげなかったが、S 氏から最上位の祖先までの間には 20~30 世代の隔たりがあるとのべていた。

この語りにおいても、パンデと、兄弟姉妹で夫婦になったブーおよびウェティとの関係が依然として不明なので、この点を指摘したが、沈黙が続いた。そのため、それ以上の情報を得ることは無理と判断し、別の話題に移っていった。

筆者は 1984 年 7 月 21 日にウォロブラ村でおこなわれたカーウヴィという儀礼に参加したことがある。そのときの資料によると、カーウヴィに集まる人々は「ブー人」(Ata Bu) と総称されていた。それと対比的にのべられていたのは、ウォロブラ村の南方数キロの位置にあるウォロアラ Wolo Ara 村とその周辺の村々に住むムベテ氏族 (Ana Mbete) だった。かれらはリセ首長国の英雄的祖先である先述のウォダとワンゲの父系子孫をふくむムベテ氏族の分派であることを自認している。ブーのムベテ氏族は、リセのムベテ氏族と同じく、ムバマ mbama という儀礼を自分たちでおこなうので、カーウヴィには参加しないとのことだった。

ブー首長国におけるブー人とムベテ氏族は、ンドリ首長国におけるモレ人とンドンド人の関係に似ている。すなわち、ブーのムベテ氏族も後来者であること、戦争によりブーにおける地位を確立したことなどの口承史が知られている。またブーのムベテ氏族の長は、リセ同様、「偉大な首長」(ria béwa) とよばれる。

ブー首長国の偉大な首長の地位にあった K 氏は、1983 年 6 月 13 日に、作物の起源神話と

して、次のような物語を話してくれたことがある。遠方からの船がフローレスの北海岸のサダ岬 (Ngalu Sada) で座礁した。このときリーLi (男) とオナOna (女) という兄弟姉妹をのぞき、乗船者の全てが死んだ。…中略…リーとオナは、土地の言葉が話せなかったので、苦労して旅をつづけ、(現在ではリセ首長国内にある) ブーワトゥウェティBu Watu Weti に着くと、雨が降りはじめた。そして、(S氏が語った上の神話にもある) タナヌワまで来たとき、豪雨のために海面が上昇し、タナヌワ以外は海に沈んだ。この洪水でリーとオナをのぞき、全ての人間が死んだ。その後、かれらは、鳥や鶏が交尾するのを真似て性的に交わり、ラキLaki (男) とンゲルNgelu (女) という子を得た。ラキは遠い西方の地、バジャワBajawa まで旅をして妻としてビダBidha という名の女性を連れ帰った。ふたりの間に生まれた息子ラカLaka も同じところからナルNalu を妻にむかえた。さらに、このふたりの間にボビBobi とノンビNombi という娘が生まれた…中略…彼女たちはンドタ山で殺され、切り刻まれ、その死体から作物が生まれた。

また、1995年に書かれたカーウヴィ儀礼に関する前出のG氏のメモを読むと、この儀礼ではブー人の起源として、ジャワから船でやってきた兄弟姉妹のインセストが物語られることになっている。ただし、1984年に筆者が参加したカーウヴィでは、そのような物語が儀礼的に披露されることはなかった。

以上を総合すると、やや資料に不備はあるが、次のことがいえるだろう。ブーの先住者ブー人の祖先は、婚出しなかった姉妹Xの子孫とXの兄弟の父系子孫からなる点で、ンドリ首長国のモレ人の祖先と似ている。ただし、ブーでは、大洪水を生きのびて夫婦になった兄弟姉妹を祖先として再確認するカーウヴィの儀礼を先住者であるブー人がおこなっている。したがって、ブーの先住者には、①洪水を生きのびて夫婦となった兄弟姉妹と、②婚出しなかった姉妹Xとその兄弟という2組の兄弟姉妹が関わっていることになる。①は大洪水の生存者だったという点でンドリの先住者の祖先である兄弟姉妹と同じであり、②はンドリの先住者の女祖モレの夫が入婿だったことと類似している。それゆえ、両者を包括し、かつ区別する概念が必要である。

両者を包括するために「原初対」(primordial pair) の概念を提示するとともに、両者を区別するために、①のような原初対を「近親婚型」(incestuous type)、②のような原初対を「婿入婚型」(uxorilocal type) とよぶ。このターミノロジーを使うと、星見の起源神話に登場する原初対は近親婚タイプであり、リセ首長国の初代の女性首長ケワとその兄弟ドシとの関係は婿入婚タイプに分類できる。

近親婚型と婿入婚型が相互に転換する可能性を指摘しておきたい。2016年6～9月におこなった調査では、上記のS氏と氏族を同じくする、ヌアヌラNua Nula村に住む大首長のW氏から、G氏の談話では名前の不明だった姉妹「X」について、次のような話を聞いた。パン

デの息子は、ワラをはじめとする4名だけでなく、長兄のレケ Léké や次兄のンドル Ndolu をはじめとする7名であり、彼らには3人の姉妹がいた。そのうちの2人は近隣の村の有力者に嫁いだ。しかし次女のレンゴ Rengo は兄弟のンドルと近親相姦を犯した。ふたりは他地域に逃げたが、長兄のレケが呼び戻した。そのために、かれらの墓はヌアヌラ村にある。S氏はレケとンドルの子孫である。

ンドリ首長国の西に隣接するムブリ首長国で語られる先住者の起源神話には多くの異譚があるが、そのひとつは次のように語られる。ムブリ首長国の先住者の祖先である3人の兄弟 (Mbuli, Rongge, Ranggo) と3人の姉妹 (Mbu, Ngeno, Ja'a) が船でグジャラート Gujarat からマラッカを経由してやってきた。かれらは、ムブリの南岸で難破し、無主地だった現在のムブリ首長国の領地に住み着いた。かれらは相互に結婚して子孫を得た。この神話は、海の彼方からやってきた兄弟姉妹が近親婚をおこなった点をのぞくと、ンドリ首長国における婿入婚型の神話と酷似している。

次にリセ首長国の南西に隣接する小さな首長国、リセデトゥ Lise Detu の起源神話を検討することにしよう。

4. リセデトゥ首長国をふくむ比較

中部フローレスには、大洪水がおこり、一組の兄弟姉妹だけが生き残ったとされる、いくつかの場所がある。すでにのべたター村やタナヌワのほかに、エンデ県の最高峰「レペムブス山」(Keli Lepe Mbusu, 1,745 m)、「ムトゥ山」(Keli Mutu, 1579~1663 m)、「ヌンバ山」(Mbotu Numba, 674 m) などがある (図1参照)。

洪水等の大災害を生きのびた兄弟姉妹が夫婦になることで、人類の再生を物語る神話は、オーストロネシア諸語が話される地理的範囲をこえて、南西諸島や東南アジア大陸部をふくむアジア太平洋地域で広く知られている [Dang Nghiem Van 1993; 大島 1992: 59-91; 山下 2003: 170-266; 伊藤 1964: 167-202]。その分布には地理的な濃淡があり、中部フローレスは台湾や南西諸島とともに、その濃度がかなり高い地域のひとつである。

以下に引用するのは、オランダ植民地期に中部フローレスのリオ自治領 (Landschap Lio, Onderafdeeling Ende) の長 (ラジャ) だったリセ首長国出身のピウス・ラシ・ワンゲ Pius Rasi Wangge が書き残した「わたしの出自」と題する手稿の冒頭部である。

ハロ Halo とその妻のアナ Ana はレペムブス山に住んでいた。かれらのことを人は「孤児」(アナ・ハロ ana halo) とよぶ。かれらの母と父は海が押し寄せ、陸が泥となったときに死んでしまったからである。アナ・ハロとその一族の系譜は海が押し寄せ、陸が泥になる以前にさかのぼる。かれらの権限は強大で、莫大な富をもっていた。かれらが住んでいた村

の石垣、村の中心にある円形広場、その中央にある石柱、それに祭祀家屋の階段や土台柱は全て金でできていた。その村はムトゥ山にあったが、全て海にのみこまれた。その村で世界を統べていたのはコンデ Konde とラトゥ Ratu だった。そのため、今日にいたるまで死後、人間の魂はムトゥ山にいくのである。

海が押し寄せてきたとき、人々は死に絶えた。そのときアナとハロはまだ子どもだった。かれらは長い剣とともにレペムブス山に流されていった。海の上昇はとどまることなく、レペムブス山は天に押し上げられていった。アナとハロは、もうすぐ天と地にはさまれて押し潰されるだろうと語り合った。モダマ (léké, *Entada phaseoloides*) の繁みはすでに天に達していた。ハロは剣をぬき、モダマを切った。すると海は下がり、天は遠のきはじめた。山は下降し、海の水は減っていった。しかし、大地は泥沼だった。かれらはキノコ、キクラゲ、シダ、昆虫の幼虫、バッタ、ネズミ、猿、ジャコウネコ、サトウヤシの芽などを生で食べた [原文にある動植物名を削除]。火がなかったからである。アナとハロは大きくなり、ある日、バッタが交尾しているのを見た。ハロとアナは妊娠するまでバッタの真似をつづけた。こうしてかれらは男女の営みを知ったのである。そのうちにアナの腹が大きくなった [Rasi Wangge 1946]。

この物語では、中部フローレスに並存する洪水神話と天地分離神話がひとつになっており、天と地を結びつけているモダマを切ることで天地を分離させる行為が洪水をおさめる行為にもなっている。また、始祖の兄弟姉妹が動物の交尾を真似て男女の営みを知ったというブー首長国の作物起源神話でも語られているモチーフはアジア太平洋地域に広く分布しており、沖縄本島中部北岸の古宇利島からもバッタの交尾を真似る神話が報告されている [山下 2003: 183; 佐喜眞 1922: 5]。

リセ首長国において一般的に知られている先住者はレペムブス山から降りてきたアナとハロの子孫である。リセドゥ首長国においても同様であり、その起源神話に登場するバジョウォオ Bhajo Wawo は、レペムブス山から降りてきて無主地 (tana penga, watu lénga) に住んだ者の子孫とみなされている。しかし、レペムブス山から降りてきたために先住者は「降りてきた者」とよばれるのではない。山からであれ、海からであれ、無主地に最初に到達することは「アウ竹の帆柱とともに降り、船板とともに下る」(wa'u no'o mangu au, nggoro no'o fi'i jo) と表現されるからである。¹⁶⁾

16) 青木 [2005: 73] は fi'i jo を「筏」と訳している。多くのリオ人はそれが何かを明確に説明できない [Arndt 1933: 108-109参照]。それを「船板」として説明したムブリ首長国 (Tana Mbuli) の出身者は、海の彼方から祖先を乗せてきた船がムブリの海岸付近の岩 (Watu Sobo) に衝突して大破し、祖先は漂流する船の帆柱や船板につかまりながら上陸したとのべていた。

リセデトゥ首長国の起源を説明する以下の神話は、リセ首長国の何人かの首長から聞いた物語を要約したものである。先にリセの英雄的祖先のウォダとワンゲについてのべたが、ウォダとワンゲの父はムベテ Mbete, ムベテの父はウォダ Woda, ウォダの父が次にのべるラシ Rasi である。

ワク Waku とラシ Rasi は兄弟だった。彼らはムブリ首長国に現在もあるワクレウ Waku Le'u 村に住んでいた。ワクは大きな儀礼をおこなうことを計画していたが、その成就にはラコパンダ (lako panda, 字義訳：小型の犬) が必要だった。そこで兄のワクは弟のラシにラコパンダを捕まえてくるように命じた。

ラシは探し歩き、とうとうラコパンダを見つけたが取り逃がした。しかし、その鳴き声がリアラコ Lia Lako (犬の洞窟) のなかから聞こえてきた。そこでラシは洞窟に入っていった。その洞窟は長く、ラシはラコパンダを追いながら、ンドウンギロオ Ndunggi Lo'o の近くにあるヌアリセ Nua Lise にまで到達した。洞窟から出たところで、ラシは先住者のバジョワウォ Bhajo Wawo と出会った。ラシはバジョワウォにラコパンダを見かけなかったかとたずねると、バジョワウォは、それは自分のものであり、娘のベナ Bhena (あるいは Bheni) と結婚するならラコパンダをやるといった。ラシはこの条件をのみ、ラコパンダを持ち帰った。こうしてワクは無事に儀礼をおこなうことができた。だが、今度はラシがワクにイカンギイシピ (ika ngi'i sipi; 字義は「砥石の歯の魚」だが、「人間のように切歯儀礼を受けた魚」意か) を探してくれるように頼んだ。¹⁷⁾ バジョワウォは、ラシが娘のベナと結婚するにあたり、婚資としてイカンギイシピを要求したからである。だが、兄のワクは見つけることができなかった。

そのため、ラシはムブリ首長国を出て、ジュケ氏族が先住者となっている土地に住むことになった。バジョワウォの父系子孫であるジュケ氏族 (Embu Jeke) の長は「母父の首長」(mosa laki iné amé), ラシの父系子孫の長は「根本の首長」(mosa laki pu'u) になっている。¹⁸⁾

そうであるなら、ラシは、婚資を支払わなかった入婿であり、故地に帰還しなかった点でンドリ首長国の先住者の女祖モレの夫となった外国人や、ブー首長国の先住者の女祖 X の夫と同じである。

ただし、次のような違いもある。モレの夫の子孫や X の夫の子孫は、それぞれの首長国における先住者となっている。換言するなら、妻方に吸収されている。他方、ラシの父系子孫

17) ラコパンダもイカンギイシピも具体例で示すことのできない名前だけの動物である。

18) リセデトゥでは、バジョワウォを始祖とする父系リネージ (Wewa Bhajo Wawo) とジュケ氏族は区別されている。

はラシ氏族 (Embu Rasi) という父系集団を形成しており、ラシの息子であるムボティ Mboti, パティ Pati, マリ Mali, ングオ Ngeo, ングラ Ngera はラシ氏族の下位分節体 (ana あるいは embu) の始祖となっている。また、ラシの末子 (男) のウォダ Woda にはワンゲ Wangge, センダ Senda, ムベテ Mbete という息子がおり、そのそれぞれがワンゲ氏族, センダ氏族, ムベテ氏族の始祖となっている。リセ首長国において英雄視されている先述の兄弟ウォダとワンゲはムベテの息子である。

リセデトゥ首長国におけるジューケ氏族の首長とラシ氏族の首長の関係を、筆者は婚姻連帯＝縁組 (affinal alliance) によるものと理解していた [杉島 1990: 584-586; Sugishima 1994]。だが研究を進めるうちに、それは不適切な理解ではないかと考えるようになった。リセデトゥでも母方交叉イトコ婚は理想的な結婚である。したがって、リセデトゥの先住者であるジューケ氏族の女がラシ氏族の始祖に嫁いだのなら、わずかにせよ、両者を代表する首長の間でおこなわれた母方交叉イトコ婚の具体例があるはずである。しかし、その痕跡を系譜のなかに見つけることはできなかった。

またジューケ氏族の長を「母父の首長」、ラシ氏族の長を「根本の首長」とよぶ表現も、両者の婚姻連帯を明示するものではない。確かに与妻者は「母父」とよばれるが、先述のように、「母父」にふくまれる母の兄弟は「根幹」(pu'u hamu) とよばれる。それゆえ、母父の首長と根本の首長は婚姻連帯によって関係しているというよりはむしろ、もとはひとつだったものが、2 つになったような関係なのである。

これと同じことはリセ首長国からもいえる。先述のように、リセは 20 あまりの首長国を併合することでつくられたものである。そのひとつにクネマラ首長国 (Tana Kune Mara) の領地だった土地 (以下「クネマラの土地」) がある。リセには偉大な首長 2 人のほかに、根本の首長と母父の首長がいる。その起源について前代の偉大な首長のひとは次のようにのべていた。

タニウォダ行政村 (Desa Tani Woda) からハンガランデ行政村 (Desa Hanga Lande) にかけての土地には現在まで多くのクネマラ人 (Ata Kune Mara) が住んでいる。かつてそこは独立した首長国だった。しかし、ペダドゥア Pedha Du'a がクネマラ人の大首長だったときのこと、ブー首長国のボロアンド Bolo Ando がクネマラ人から領地を奪い取ろうとして戦争をしかけてきた。その際、ペダドゥアの娘スラ Sula をとらえて凌辱した。しかし、ペダドゥアはどうすることもできなかった。そこでウォダとワンゲ (リセの英雄的祖先) に助けを求めた。ウォダとワンゲは、道わきの丈高いワセオバナ (gai) のなかでボロアンドを待ち伏せ、矢で射殺した。そして、馘首の後、その首をペダドゥアに差し出した。ペダドゥアはウォダとワンゲを「クネマラ人の土地の支持者」(miu ina, tuké tana Kuné, dhana watu

Mara) とし、ウォダはスラを娶った。こうしてペダドゥアは母父の首長となり、ウォダは根本の首長となった。ウォダはクネマラ人の土地に村を構えることはなかった。しかし、長男のタニ・ウォダ Tani Woda は、根本の首長としてクネマラの土地内の村ラテンゴジ Rate Nggoji に住み、代々の根本の首長もこの村にある祭祀家屋に居住してきた（タニ・ウォダの名前は行政村名にもなっている）。

母父の首長の住むファタンドボ Fata Ndopo 村は、ラテンゴジ村同様、クネマラの土地内にあり、ラテンゴジ村の北西数キロにある（図 1 参照）。

母父の首長と根本の首長の間で母方交叉イトコ婚がおこなわれてきたかどうかについてたずねた際、母父の首長は、スラがウォダに嫁いだことは確かだが、母父の首長と根本の首長の間で母方交叉イトコ婚がおこなわれたことは一度もないといっていた。

なお、クネマラの土地では、クネマラ人を土地から追い払った結果、モレ人の首長のロボロボが戦争に負けてンドリ首長国を去ったときと同じような凶作がおこったという口頭伝承が知られている。クネマラ人の祖先は、遠方からの船がフローレス北岸のサダ岬で座礁し、無主地だったクネマラの土地に定着したとされる。

次のことは、母父の首長と根本の首長との関係と、与妻者と受妻者との関係が根本的に異なっていることを明確に示している。母父の首長と根本の首長が並存する中部フローレスの多くの首長国にいえることだが、首長を列挙してもらうと、最初にあげられるのは必ずといっていいほど根本の首長であり、母父の首長はそれに続く。また根本の首長が母父の首長よりも位階序列的に上の地位にあるとのべる者もいる。くわえて、根本の首長を長とする出自集団は母父の首長の出自集団よりも成員が多いだけでなく、根本の首長の祭祀家屋は母父の首長の祭祀家屋よりも高く大きい。これに対して、与妻者と受妻者の関係では、すでにのべたように、与妻者が受妻者の栄枯盛衰を支配しており、前者が後者に対して圧倒的に優位している。

これまでのべてきたことを総合すると、リセデトゥ、リセ（ここでは母父の首長と根本の首長との関係についてのべ、ハゴワウォと偉大な首長の関係については後述）、ンドリ、プーの原初対には次のような共通点と相違点がある。リセデトゥやリセの母父の首長と根本の首長の関係にも、ンドリとプーの先住者の祖先にも、入婿を夫にしたという意味で婚出しなかった姉妹とその兄弟の関係が組み込まれている。この点でリセデトゥ、リセ、ンドリ、プーは区別できない。しかし、リセデトゥとリセでは、先住者の女と結婚した入婿の父系子孫が先住者とは別個の父系集団を形成している。

したがって、婿入婚タイプの原初対から派生する子孫には 2 種類の異なる組成があることになる。そのひとつはリセデトゥやリセにおける母父の首長（兄弟の子孫）と根本の首長（姉妹の子孫）が別々の父系集団を形成する「分岐型」（bifurcate type）であり、もうひとつは、

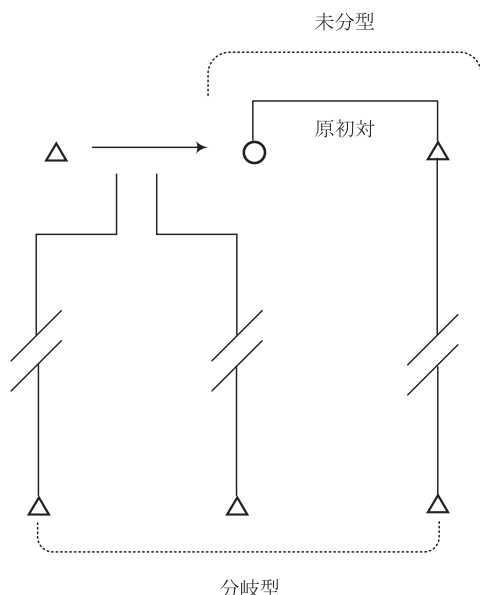


図3 婿入婚タイプの未分型と分岐型

兄弟と姉妹の子孫が「先住者」として一括される「未分型」(inseparate type)である(図3参照)。

本稿では紙幅の関係で詳述できないが、下にのべるリオ語の方言域の違いにかかわらず、ウォロジタ Wolojita, ンゲラ Nggela, ソコリア Sokoria, ウォロトボ Wolotopo などの多くの首長国では確かに分岐型がみられる。¹⁹⁾ それゆえ、分岐型と未分型を区別することには明らかに意味がある。また、分岐型と「未婚」の女性首長が並存する事例はない。このことも分岐型と未分型を区別する大きな論拠である。

ただし、分岐型と未分型は並存可能である。リセ首長国の母父の首長と根本の首長の関係は分岐タイプである。他方、ハゴワウォと偉大な首長の関係は未分型である。両者は相補的な関係にあるわけではなく、同様なものの並存である。根本の首長と偉大な首長の競合関係や、根本の首長と偉大な首長のどちらが高位であるかという、リセ人たちが繰り返す自問自答は、このことを示している。

19) 「ンゲラ首長国」(Tana Nggela)の「母父の首長」(mosa laki iné amé)の祖先は北岸地域から降りてきてンゲラの土地に最初に住み着いたとされる。ンゲラは、この先住者の女性の名前であり、彼女が海岸付近の池(Tiwu Pela)で水を汲んでいるときに、海の彼方からやってきた男(ata Goa Jawa)と会い、その男と結ばれた。ンゲラの夫は根本の首長となり、先住者の長は母父の首長となった。しかし、母父の首長と根本の首長との間で結婚がおこなわれたのは、その1回だけであることを母父の首長は祖先の系譜に基づいて明言していた。1980年代後半に1年ほどンゲラで調査をおこなったデ・ヨングは、根本の首長が代表するリア家(Sa'o Ria)と母父の首長が代表するラボ家(Sa'o Labo)が持続的な婚姻連帯の関係にあるとのべているが正確ではない[de Jong 1998: 144-145]。

5. ウォロガイ首長国との比較

本節では、長年ウォロガイを中心に中部フローレスを研究してきた青木 [2005] の優れた民族誌に依拠して比較をおこなう。²⁰⁾

「k」と「h」の音韻交替に着目すると、リオ語は2つの方言に区分される。この2つを「K語」と「H語」とよぶ。H語が話されるのはリセ、リセデトゥ、モニ、ンドリ、ブー、ムブリという6つの首長国である。したがって、H語はK語が話される地域の中央部を南北に縦貫しており、K語が話される地域を東西に分断している。この2つに分断されたK方言は十分に異なっているので、H語の西側のK語を「西K語」、東側のK語を「東K語」とよび、両者を区別する必要があるだろう。²¹⁾ ウォロガイは西K語が話される地域にふくまれる。

ウォロガイ Wolo Gai 首長国はレペムブス山の南麓に広がっている。その中心村のウォロガイ村には13の祭祀家屋（下記の①～⑬）が円形広場を取り囲むように建てられている [青木 2005: 98]。

この村の広場にはクダ keda とよばれる儀礼社がある。リセ首長国では、クダ（H語では heda）のある村は大首長が住む村であることを示している。ウォロガイでもクダの価値はリセとほぼ同じだろう。儀礼社には男女一對の像（Ame Naka Ine Naju）が安置されていたのではないかと推測するが、1983年に盗まれる以前、この像は、クダではなく、村の上手にある特別の小屋におかれていたという [青木 2005: 178]。

青木が「家」とよぶ集団は、比較研究上、本稿で地縁的父系リネージとしてのべてきたものに相当する。ウォロガイに祭祀家屋をもつ6つの家の間の相互関係は、微妙であり、注意深い分析を必要とする。

ウォロガイにおいても、レペムブス山にアナカロ Anakalo という兄弟姉妹がおり、かれらのインセストから生まれた子孫が山から降りてきたという神話が知られている。ただし、それは洪水の要素をふくまない天地分離型の神話である。この神話ではレペムブスの山頂だけが海から出ており、天と地をモダマが結びつけていたが、アナカロがモダマを切断したために、天地が遠のき、現在のような姿になったとされる。

レペムブス山から降りてきて無主地だった土地に住みついたアナカロの子孫は「降りてきた子」（ana nggoro, ana：子）とよばれる。この総称はリセやリセデトゥにおける「降りてきた者」（ata nggoro, ata：人）と類似しているだけでなく、そうした総称が知られていることも

20) ウォロガイの北ではウォロムク Wolo Muku 行政村を中心に Signe Howell が調査をおこない、本稿で扱う研究テーマでいくつか論文を書いているが [Howell 1990, 1995]、比較できるほど十分なデータがもりこまれておらず、本稿ではとりあげない。

21) 青木の言語地図にはH語と東K語の区別がない [青木 2005: 53]。

リセやリセドトゥと共通している。したがって、ウォロガイの「降りてきた子」は本稿でいう先住者に相当すると考えてよいだろう。

ウォロガイではムブーMbu という女性が切り刻まれて作物の種となった神話も知られている。このムブーはレペムプス山に住んでいたとされ、明らかにンドリ首長国起源ではない〔青木 2005: 270; また Yamaguchi 1989: 485-486 参照〕。付言しておく、レペムプス山周辺の西 K 語地域では兄弟姉妹で夫婦になった原初対から稲の母が生まれたという神話が広く知られている。

ウォロガイでは後来した功績者の起源神話も知られている。その名はセコ・レンゴ Seko Lengo であり、海の彼方 (India Belakang)²²⁾ からやってきて、中部フローレス南岸のンガルポロ Ngalu Polo に上陸し、²³⁾ ソコリア Soko Ria に定住したのち、方々に旅をつけ、最後にウォロガイにやってきたとされる。セコの功績は「強さは身から、力は体から」(tego no'o tebo, mulé no'o lo) と表現され、これはリセにおける功績者の形容とまったく同じである。だが、先住者との対比で、セコの子孫が功績者として称揚されたり、セコの子孫がリセ首長国におけるように先住者から奪い取った土地を「功績者の土地」として保有することはない。このことを象徴的に示しているのは、セコがウォロガイで暗殺されたという伝承であり〔青木 2005: 74, 277-282〕、セコの子孫を自認する者もない。

ウォロガイの6つの家のなかで最も大きいのはビスコジャ家 (①) であり、ウォロガイを代表する「偉大な家」(sa'o ria) とよばれる。ビスコジャ家には10の分家があり、そのうちの7つが祭祀家屋 (②～⑧) をもっている。また、「根本の首長」(mosa laki pu'u) と「偉大な首長」(ria béwa) はビスコジャ家の男性成員から選出される。ビスコジャ家の最上位の祖先の名はセコであり、それをセコ・レンゴと同一視する者もいるが、それを否定する者もいることを青木は指摘している〔青木 2005: 106-110〕。

ヌアロア家 (⑨) はビスコジャ家の「母父」であり、ビスコジャ家に儀礼的リーダーシップを与えたとされる。このことから、ヌアロア家の女が外来者であるビスコジャ家の始祖の妻となった婿入婚タイプの原初対の存在や、この原初対の子孫が分岐タイプを形成していることなどを予想しがちだが、ヌアロア家とビスコジャ家が与妻者と受妻者の関係にはないことを青木は明言している〔青木 2005: 111-112〕。

⑩リニ家、⑪ウォロガレ家、⑫ウォロムナ家は、ビスコジャ家によって儀礼的リーダーシップを奪われた、あるいは、ビスコジャ家に儀礼的リーダーシップを与えたことを主張してい

22) 「Hindia/India Belakang」(裏のインド) は「Hindia Muka」(表のインド＝南アジア) と対比され、東南アジア(特に大陸部)を意味する。

23) ソコリアの人々によるとセコ・レンゴは北岸のウェワリア(前出)に到着したとされる〔青木 2005: 113〕。筆者もソコリアの出身者からセコ・レンゴはマラッカからやってきて、ウェワリアに到着したという話を聞いたことがある。

る。この点で、これらの家は、ヌアロア家と同様の関係をビスコジャ家に対してもっているといえるだろう。また⑬ソコリア家はビスコジャ家と対等で親密な関係にあるとされる [青木 2005: 112-121]。

そうであるなら、ビスコジャ家はウォロガイを代表する家だが、他の 5 つの家もビスコジャ家とともに、ウォロガイの因果根であることを主張しているのである。

ウォロガイには「母なる首長」(iné mosa laki) とよばれる女性首長が各家におり、ビスコジャ家には 4 人の女性首長がいる。彼女たちの主な役割は、首長国レベルでの儀礼に際して神々に供える食物の料理をおこなうことにある。母なる首長は、家から婚出していない女性であることにくわえ、各家の男性首長と兄弟姉妹の関係にあるとされる [青木 2005: 137-144]。この点で母なる首長はリセの女性首長ハゴワウォと似ている。しかし、ウォロガイの女性首長は、リセのハゴワウォとは異なり、性の規範から逸脱するような儀礼状態におかれることはないようであり、少なくとも青木 [2005] にそのような記述は見当たらない。

女性首長がウォロガイの 6 つの家のそれぞれにいることは、全ての家がウォロガイ首長国の因果根であることを主張している状況と密接な関連があると筆者は考えている。また次のべるように、西 K 語地域の他の首長国では、そのそれぞれにひとりの女性首長がいることが一般的であることも考慮する必要がある。

6. 西 K 語地域の諸首長国をふくむ比較

西 K 語地域に女性首長のいる首長国がいくつあるか筆者は把握できていない。しかし、その分布域はレペムブス山の南麓から北西方面の低地地帯に限定されているようである。レペムブス山の北側の首長国ヤリカムボコテル首長国 (Tana Lika Mboko Telu) から西側に女性首長はいない。また、西 K 語地域の南部にも女性首長はいない。

1997 年 1 月にウォロガイ近くのングンベラカ行政村 (Desa Nggumbe Laka)、ウォロガイの北西に位置するファタアトゥ行政村 (Desa Fata Atu)、マウテンダ行政村 (Desa Mau Tenda) のそれぞれで 1~2 日の調査をおこなった (図 1 参照)。その主な目的はインドネシア政府の土地政策が各行政村でどのように実施されているかを知ることにあつた。

1997 年 1 月 9 日、ングンベラカ行政村の村長と会うためにペイベンガ Pe'i Benga 村を訪ねた。その際に主に村長から次のような話を聞いた。

ペイベンガ村にはンドポランバ家 (Sa'o Ndopo Lamba) がある。先述のように、ウォロガイのビスコジャ家には 10 の分家があるが、そのひとつにベナ Bhena 家がある。ンドポランバ家はこのベナ家と兄弟関係にある。すなわち、ンドポは兄 (年長系)、ベナは弟 (年少系) であり、かれらの系譜はレタ Leta、レタの父はセコ Seko、セコの父はレンゴ Lengo、レンゴの父はラカ Laka へと続く (図 4 参照)。ラカと兄弟たちは海の彼方のマラッカからやってき

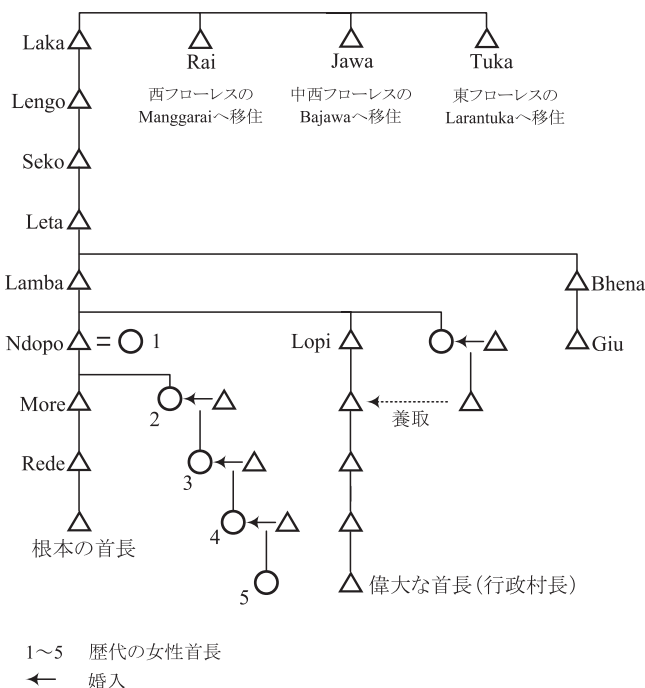


図4 ペッイベンガの女性首長の系譜

て、中部フローレス南岸のウォロトボ Wolo Topo に到着した (図1 参照).²⁴⁾ その孫のセコ・レンゴは、ウォロトボから出発して方々でウェサ wésa という儀礼をおこない、²⁵⁾ ウェサをおこなった土地を領地にしていった。セコ・レンゴは、ソコリア Soko Ria, ロガリア Roga Ria を経て、ウォロガイにやってきた。

ペッイベンガ行政村には「死んだ犬の代償」(Tana Toko Lako) という名の土地がある。レペムブス山の北側に住むウング人 (Ata Unggu) がわれわれの犬を盗み、矢で射殺して食べたことがある。その代償として得た土地が「死んだ犬の代償」である。この土地にンドボ Ndopo と弟のロピ Lopu がウォロガイ村から移り住んできたのである (図4 参照)。

ペッイベンガ行政村には、もうひとつ、モニ人 (Ata Moni) から奪いとった土地 (Tana

24) 筆者がインタビューしたウォロトボ首長国の首長のひとり、ウォロトボの一群の祖先は Laja Jawa という海の彼方の場所からやってきて、中部フローレス北岸のウェワリアに到着したと述べていた。もうひとりの首長は、ウォロトボで最も古いのはアタロボ家 (Sa'o Ata Robo) であることや、その祖先はレペムブス山の北側のカンガナラ Kanga Nara 首長国からやってきたことを、多数の経由地の名をあげながら語っていた。こうした相違はあるが、セコ・レンゴという名前が一度も出てこないという大きな共通点がある。ウォロトボとソコリアとの関係の詳細については機会をあらためてのべる。

25) wésa は撒くことを意味するが、当時のフィールドノートには動詞の目的語が書かれていない。しかし儀礼行為だったことは確かなので、ここでは「儀礼をおこなった」と訳す。ムブリ首長国では根本の首長の祖先が子孫繁栄のために、鮮烈な芳香を放つコブミカンを撒く儀礼 (wésa mboko mbandga) をおこなったという故事が知られている。

Godo Watu Ngange) がある。その広さは「死んだ犬の代償」の土地とほぼ同じである。この土地の「根本の首長」(mosa laki pu'u) はンドボランバ家ではなく、別の家 (Sa'o Wuli Wula Keka Leja) に属しており、この家には根本の首長と偉大な首長もいる。

ペイベンガ村にはンドボランバ家の祭祀家屋 (sa'o ria), ンドボランバの骨を安置してある屋根つき壁なしの建物 (balé toko Ndopo Lamba), それに集会所 (kuwu) がある。しかし、儀礼社 (keda) や男女一対の像を自前ではもっておらず、それらはウォロガイにしかない。

ンドボランバを始祖とするンドボランバ家には、「根本の首長」(mosa laki pu'u) と「偉大な首長」(mosa laki ria béwa) のほかに 3 名の男性首長 (mosa laki éko wawi, teka bega koré mboré, mosa laki ajé wawi) と「偉大な母、王たる妻」(iné ria fai ngga'é) とよばれる女性首長が 1 人いる。また、ンドボランバ家を支える 16 人の小首長がいる。

歴代の女性首長は 5 人おり、図 4 に示したように、多くの場合、母系的に継承されてきたといってよい。ただし、村長は次のように説明していた。女性首長にはンドボランバ家の女性が就任する。女性首長は結婚してもいいが、夫がンドボランバ家に婚入することになる。この夫婦から娘が生まれ、ンドボランバ家から婚出する場合には、「婚資（結納）はより高額になる」(weli ngawu so'o weli)。そのような高額の婚資が支払われて娘が婚出したり、女性首長に男子しか生まれなかった場合には、竹を火にかざして破裂させ、その割れ方を見るト占 (so bhoka au) をおこなって、ンドボランバ家のなかから後継者を決める。

ウォロガイとの関係は現在どうなっているかをたずねると、かつてはベナ家でおこなわれる共食儀礼に 1 年に一度参加していたが、1961 年以降は問題があつていかなかった。その詳細は語られなかったのか、聞かなかったのか、フィールドノートはそこで途切れている。

以上でのべたことから、ペイベンガ村はウォロガイから最近になって分離した最小規模の首長国といえるが、その自立性は十分に達成されていないといえるだろう [比較参照, 青木 2005: 89]。

1997 年 1 月 6 日、ファタアトゥ行政村の村長と会うために村長宅を訪問した。以下は主に村長から得た情報である。ファタアトゥ行政村の村域にはウォロオジャ首長国 (Tana Wolo Oja) がふくまれている。またデトゥンガリ首長国 (Tana Detu Nggali) がファタアトゥ行政村からラノコロ行政村 (Desa Lano Koro) にかけて広がっている。

ウォロオジャ首長国には「根本の首長」(mosa laki pu'u) を輩出するサオリア家 (Sa'o Ria), 「偉大な首長」(ria béwa) の所属するサオベンガ家 (Sa'o Benga) のほかに 8 つの家 (Sa'o Mbana Mari, Sa'o Embu Mele, Sa'o One, Sa'o Wula Leja, Sa'o Nitu など) がある。それぞれの家には男性の首長がいる。そのほかに、1 人の女性首長 (laki séré aré tana nasu uta watu, 字義訳: 地の神への供物を料理する首長) がおり、根本の首長の姉妹がこの女性首長に就任しているとのことだった。

翌日、村長とともにデトゥンガリ首長国のレヴムバンガ Lewu Mbangga 村に徒歩で出かけ、「根本の首長」(mosa laki pu'u) の M 氏と面談した。デトゥンガリ首長国には根本の首長と「母父の首長」(mosa laki iné amé) のほかに 5 人の大首長 (mosa laki) がいる。根本の首長と母父の首長の間で母方交叉イトコ婚 (dhuku tu lénggé lima) がおこなわれているか、という筆者の質問に、根本の首長はおこなわれていると答えたが、具体例をあげての説明はなかった。

デトゥンガリ首長国の中核村には男女一対の像 (ana déo) を安置していた儀礼社 (keda) がある。1980 年代に盗まれる以前は、母父の首長がこの像を衣類等で飾る (paké saré kando nago) 役目を担っていた。

デトゥンガリにおける 7 人の大首長のなかには 1 人の女性首長 (mosa laki séré aré tana nasu uta watu) がふくまれている。根本の首長の姉妹がその地位にある。また、7 人の大首長のなかにはふくまれないが、母父の首長の姉妹も、女性首長と同様の役割を果たしているとのことだった。

以上でのべたように、西 K 語地域の 3 つの首長国における女性首長は全ての父系集団にいるわけではない。女性首長の地位には根本の首長の姉妹が就任し、両者の関係は首長国の因果根と不可分な関係にある。そうであるなら、ウォロガイにおける全ての家に女性首長がいる事態は、ウォロガイの特殊事情であり、西 K 語地域における女性首長は、リセ首長国のハゴワウォとひとつづきの存在だということになる。ただし、次のような違いもある。すでにのべたように、ハゴワウォはボオの物忌み期間中、性の規範から逸脱するような儀礼状態におかれるのに対し、西 K 語地域における女性首長がそのような状態におかれることはない。

ウォロガイ、ウォロオジャ、デトゥンガリには根本の首長と母父の首長がいる。これは婿入婚型のサブタイプである分岐型を想起させる。だが、先述のように、ウォロガイでは両者が婚姻によって結びつく関係にはないことが報告されている。また、ウォロガイ、ウォロオジャ、デトゥンガリをふくむ西 K 語地域の北部について広くいえることだが、²⁶⁾ この地域には先住者だけからなり、外来者のいない首長国が数多くある。そこで広く共有されているのは、首長国の長や民の全員がレペムブス山の頂で大洪水を生きのびた兄弟姉妹アナとハロの子孫であるという伝承である。デトゥンガリ首長国の場合には、アナとハロから現在の根本の首長にいたる 33 世代のうちに、通婚しあう父系集団が分化していったとされる。すでにのべたタイポロジーの延長上で、これらの理解を目指すならば、婿入婚型を未分型と分岐型に区分したのと同様に、近親婚型を未分型と分岐型に区分し、暫定的にウォロオジャとウォロガイを前者、デトゥ

26) 本稿では注で触れるにとどめるが、西 K 語地域の南部のいくつかの首長国には、婿入婚型の分岐型がみられる。そこでは根本の首長の姉妹が女性首長に就任することはない。そのかわりに、根本の首長が特定の先住者集団の女性と結婚した場合にかぎり、その女性が神々への供物を料理する女性首長の役割を担う。

ンガリを後者に分類したうえで、さらなる調査と比較研究を進める必要がある。

前任者の死去や引退にともない、大首長が父系的に継承され、その姉妹が女性首長に就任する点で、ハゴワウォと西 K 語地域の首長国における女性首長は同じである。それゆえ、女性首長とその兄弟からなる原初対を「継承型」(succession type)、近親婚型と婿入婚型の原初対を「祖先型」(ancestor type)と総称することができるだろう。

お わ り に

フィールド調査から得られた資料の複雑さを縮減しながら、事象間の共通点と相違点を明らかにするために、本稿ではタイポロジーを多用した。そこから明らかになるのはさまざまなタイプの原初対が中部フローレスの在来政体である首長国の因果根に関わっていることである。

この原初対は親族の規範と矛盾する。中部フローレスにおいて親族は与妻者、自集団、受妻者の 3 つからなり、女性は与妻者から自集団、自集団から受妻者へと一定の方向に婚出することを大原則とする。したがって、姉妹は結婚によって自集団を出て、兄弟と分離されるべきであり、未婚の母の生んだ「姉妹の子」は親族の位相ではポジティブに評価されることはない。だが、首長国という政体のレベルでは、兄弟と未婚の姉妹の未分離な関係がその因果根として出現する。

ブー首長国出身の G 氏が X の子孫の大首長が「姉妹の子」であることを不可解に感じるのには、親族と政体を同一の位相で考えていることに由来する。また、ンドリ首長国の M 氏と O 氏がモレ人の大首長について語る際の「姉妹の子」という言葉づかいにも同様の当惑が潜んでいるように感じられた。だが、親族と政体の違いをいっそう明確に示しているのは、ブー首長国の近親相姦を犯した兄弟姉妹ンドルとレンゴをめぐる伝承であり、先述のように、かれらは追放されるどころか呼び戻され、その子孫は現在にいたるまで、ブー首長国の先住者集団のなかで重要な位置を占めている。

親族と政体との不整合な関係は中部フローレスだけでなく、広くオーストロネシア諸族から報告されており、この点でオーストロネシア諸族には大きな類似性がある。台湾のオーストロネシア系在来民のアミ Ami 人は、母系出自と夫の妻方居住婚で知られるが、次に要約するアミの神々の起源神話には中部フローレスの天地分離・洪水神話、近親婚型の原初対の因果根としての働き、作物の起源神話、星見の起源神話の要素の一部が濃縮された形でふくまれている。

西方に鍛冶屋の神と雷鳴がおり、この兄弟姉妹の間に人間の魂の神と天空が生まれた。天は低く、闇につつまれていた。そこで鳥たちが集まって天を押し上げる相談をし、いろいろやってみたが、うまくいかなかった。最後に鳥秋 (tata?tsih, スズメ目オウチュウ科の鳥)

が囁りながら天を押し上げた。このとき、太陽と月が現れた。

第6代には人間をつくる神、梟（鳴き声で産まれる子の性別を告げる）、狩猟・漁労の神が生まれた。第7代には首狩、戦争、農耕、大首長を助ける神々、第8代は粟や稲などの作物の神々が誕生した。第9代にはじめて呪医のことを太陽から教わり、呪医の神が生まれた。第10～11代には呪医による治療に関わる神々にくわえ、穀倉の神や戦争での庇護を願う神などが生じた。

第12代には花蓮港と台東の間にあるカララにいた。この時代に、海の水が押し寄せて大洪水となり、一組の兄弟姉妹（Onak-Kakarawan と Mayau-Kakarawan）は溺死して星となった。夕方東方に見える星がオナック Onak で、朝方西に見える大きな星がマヤウ Mayau である。このとき、もう一組の兄弟姉妹（Pirkarau と Maokirok）が長い臼に乗って助かり、馬太鞍社の西北に聳える山に漂着した。その地で兩人は夫婦になり、沢山の子どもが生まれた。かれらのあるものは山に残って、台湾のオーストロネシア語系在来民ブスン人やアタヤル人の祖先、あるものは平地に下って馬太鞍社、黒漏社、七脚川社などの祖先になった。

大洪水以前が神代（no-kawakawas）、それ以後が人代（karah-tamdawan）である [馬淵東一 1974: 283-317; 臺北帝國大學土俗・人種學研究室調査 1935: 486-488]。

中部フローレスで近親婚型の原初対が首長国の因果根になっているのと同じように、この神話では、第1代の鍛冶屋の神と雷鳴の近親婚に始まり、各世代ごとに繰り返されるインセストから、アミ人の生活を成り立たせる神々が次々と誕生している。稲の母を（祖先型の）原初対の子孫とする中部フローレスの作物の起源神話は、アミの神々の系譜の一部をなすものといえる。だが、中部フローレスには、稲の母が近親婚型の原初対から派生したことを物語る第3節でのべたような作物の起源神話だけでなく [また van Suchtelen 1921: 160-161 参照]、婿入婚型の原初対から派生したことを物語る、ンドリ首長国におけるような作物の起源神話もあることを忘れてはならない。

本稿の続編では、西ポリネシアのトンガ島の王権には近親婚型の原初対と婿入婚型の原初対の双方が関わっていることや、トンガの女性首長（tu'i Tonga fefine）の夫が外国人（フィジー人）の入婿だったことをのべたうえで [Gifford 1929: 33-101; James 1991]、ンドリ首長国やブー首長国との大きな類似性を指摘したい。その過程でサーリンズの外来王論あるいは外来王論的なフィジー民族誌の読解を再考することも可能になる。

また、男女の双子が生まれると、平民の場合には、胎内で近親相姦を犯しているために村から追いだされ、浄化儀礼をおこなわなければならないのに対し、王族の場合には神のように妻と一緒に産まれてきたといわれ、将来の結婚を前提に男女の双子を育てていたバリの慣行や

[Belo 1935], スラウェシ島のブギス人の文化英雄サウエリガディン Sawérigading が双子の姉妹への恋慕と執着を通して、政体の因果根をはじめとするルヴ Luwo' 王国の基礎を築いていく神話 [Perlas 1996: 82-90] をとりあげることで、わずかにせよ東南アジア島嶼中部を比較の視野に入れることを考えている。

アーキタイプへの還元は比較研究の陥穽である。新しい事例を取り込むたびに、新しいタイプやサブタイプが定立される、不安定だが柔軟なタイプやサブタイプの（ツリー状の分類にはならない）関係づけが望ましい。本稿の続編でも、そのような方向でタイポロジーを用いながら論述を展開することにしたい。

ここでもうひとつ強調してのべておきたいのは、母系出自集団と夫の妻方居住婚がアミの親族を大きく規定しており、中部フローレスのそれとは大きく異なっていることである。だが、上に引用した神々の系譜は枝分かれし、その末端はアミ人の在来政体を統べる首長家の祖先や歴代首長の系譜につながっている [馬淵悟 1976: 16-17; 臺北帝國大學土俗・人種學研究室調査 1935: 489].²⁷⁾ このことは、原初対が在来政体の因果根になっているという中部フローレスの比較研究から得られる結論を裏書きしていると同時に、親族の様式が大きく異なっても、原初対が政体の因果根であることに変わりはないという仮説を強く示唆している。本稿の続編では比較研究の範囲を広げ、より多くの事例をとりあげることで、このことをより具体的に論じることにはしたい。

中部フローレスのリセ首長国は、功績ある者が知恵（狡知）と勇気（暴力）によって創出した新興国であり、兄弟姉妹が男女でもあった始原の過去につながる系譜をもたない。この欠落を埋めるようにリセではハゴワウォの登場する儀礼ポオがおこなわれる。

ハゴワウォと偉大な首長の関係は婿入婚型の原初対として分類できることを先に指摘した。この分類には、初代のハゴワウォであるケワと父方平行イトコとの性関係についての伝承はあるが、物忌みの期間にかぎらず、ハゴワウォと偉大な首長との近親相姦をめぐる伝承は皆無であることも考慮されている。

ハゴワウォと偉大な首長の関係が婿入婚型の原初対ならば、物忌み期間中のハゴワウォが性の規範から逸脱した儀礼状態におかれることは、これまでのべてきたタイポロジーとの関係でどのように理解されるべきだろうか。

ポオの儀礼が終わると、参加者は夕暮れのなかを急いで家路につく。その理由のひとつはポオの祭場で天の神と地の神との交合がおこなわれるとされることにある。それと時を同じくして、ハゴワウォは性の規範から逸脱した儀礼状態におかれる。この両者は次のように関係づけて考えざるをえない。ポオの物忌み期間中、首長国の人々には、先にのべた禁忌とともに、男

27) 地域差があり、アミ人の全体を母系集団と妻方居住婚で特徴づけることはできないが、本稿では議論の要点だけをのべる [臺北帝國大學土俗・人種學研究室調査 1935: 390-393]。

女間の性交の禁止が課される。²⁸⁾ ハゴワウォがおかれる儀礼状態は、この性的禁忌の対極をなすものであり、この対極化を通してハゴワウォは神々、とりわけ地の神と儀礼的に一体化されるのである。

そうであるなら、次の事柄も納得のいくものとなる。「寝ゴザは土、枕は石」(té'é tana lani watu) という、ハゴワウォがおかれる儀礼状態の表現は、物忌み期間中のハゴワウォが親族的に営まれる人間の生活の場である家屋の外にいることを示唆している。また「寝ゴザは土、枕は石」は「地の神のごとく／として(男と)寝る」と意識することもできる。くわえて、ポオ儀礼やその後の物忌み期間中のハゴワウォのふるまいは、ハゴワウォが神であるかのように、次の耕作年度における天候や収穫を左右するといわれる。

すでにのべたように、偉大な首長はリセ首長国の因果根に相当する。ハゴワウォは、地の神との儀礼的一体化を通して兄弟である偉大な首長と同等の存在となる。こうして首長国の因果根として働く原初対が顕在化する。偉大な首長とハゴワウォはポオで貢納米を受け取り、物忌みの期間に消費する。貢納米は稲魂をふくむ種籾の一部を精米したものである。それを原初対に貢納することは、稲の母を生み出した原初対に稲の母を帰還させるのと同じ意義をもつ。本稿では詳説できないが、種籾の準備からポオを経て播種にいたる一連の儀礼は作物を人の領域から神の領域へと移行させることにある。²⁹⁾

ポオの物忌みが続く9月末の夜空を眺めると、西方の地平に沈み込もうとするワウォトロ星(アンタレス)を追うように、東方の地平からウヌ星(プレアデス)が姿を現し、ほんの一瞬、天球で相対しているのが見られる。³⁰⁾ ワウォトロとウヌがこうした状態にあることを確かめたうえで、リセ首長国では偉大な首長から播種をおこなうのである。

引用文献

- 青木恵理子. 2005. 『生を織りなすポエティクスーインドネシア・フローレス島における私的語りの人類学』世界思想社.
- Arndt, Paul. 1932. *Mythologie, religion und magie im Sikagebiet (östl. Mittelflores)*. Ende, Flores: Arnoldus-druckerei.

28) ポオはリセ首長国だけでなく、中部フローレスの多くの首長国でおこなわれる。その全てで確認したわけではないが、他の首長国においても、ポオの物忌み期間中、夫婦の性的な交わりは禁止されるのが一般的である。

29) フローレスの作物起源神話では作物を創造するために女性を殺害し、その死体を作物の種として分配したのは、殺された女性の兄弟であったと語られる場合が多い [Arndt 1932: 61-63; Burger 1941: 413-416; Sareng Orinbao 1974: 143; 山口 1983: 22; Vatter 1932: 106]。この原初対は、首長国の範囲をこえて因果的な影響力をおよぼしているが、この点については機会をあらためてのべる。

30) アンタレスとプレアデスがともに現れる時間は40分程度。この状態はポオがおこなわれる9月末にはすでに始まっており、11月中旬まで続く。この時期に播種をおこなうのは必定であり、星見をするまでもないともいえる。これらのことはAstroArts社の天文シミュレーションソフトウェアStellaNavigator 10を使って確認した。

- _____. 1933. *Li'onesisch-deutsches Wörterbuch*. Ende, Flores: Arnoldus-druckerei.
- Beaglehole, Ernest and Pearl Beaglehole. 1938. *Ethnology of Pukapuka*. Bernice P. Bishop Museum Bulletin 150. Honolulu: The Museum.
- Belo, Jane. 1935. A Study of Customs Pertaining to Twins in Bali, *Tijdschrift voor Indische Taal-, Land- en Volkenkunde* 75(4): 483-549.
- Burger, P. A. 1941. Mangaraise Verhalen over het Ontstaan van de Rijst en de Mais, *Tijdschrift voor Indische Taal-, Land- en Volkenkunde* 81(3): 411-423.
- Dang Nghiem Van. 1993. The Flood Myth and the Origin of Ethnic Groups in Southeast Asia, *The Journal of American Folklore* 106: 304-337.
- Firth, Raymond. 1963. *We, The Tikopia: A Sociological Study of Kinship in Prmitive Polynesia*. Boston: Beacon Press.
- _____. 1967. *Tikopia Ritual and Belief*. Boston: Beacon Press.
- Fox, James J. 1994. Reflections on 'Hierarchy' and 'Precedence,' *History and Anthropology* 7(1-4): 87-108.
- _____. 1995. Origin Structures and Systems of Precedence in the Comparative Study of Austronesian Societies. In P. Jen-kuei Li *et al.* eds., *Austronesian Studies Relating to Taiwan*. Taipei: Academia Sinica, pp. 27-57.
- _____. 1996. The Transformation of Progenitor Lines of Origin: Patterns of Precedence in Eastern Indonesia. In J. J. Fox and C. Sather eds., *Origin, Ancestry and Alliance*. Canberra: Research School of Pacific and Asian Studies, The Australian National University, pp. 130-153.
- Gifford, Edward Winslow. 1929. *Tongan Society*. Bernice P. Bishop Museum Bulletin 61. Honolulu: The Museum.
- Goldman, Irving. 1970. *Ancient Polynesian Society*. Chicago: University of Chicago Press.
- Hocart, A. M. 1915. Chieftainship and the Sister's Son in the Pacific, *American Anthropologist* 17(4): 631-646.
- Howell, Signe. 1990. Husband/Wife or Brother/Sister as the Key Relationship in Lio Kinship and Socio-Symbolic Relations, *Ethnos* 55(3-4): 248-259.
- _____. 1995. Rethinking the Mother's Brother: Gendered Aspects of Kinship and Marriage among the Northern Lio, *Indonesia Circle* 67: 293-317.
- 伊藤清司. 1964. 「沖縄の兄妹婚説話について」谷川健一編『叢書 わが沖縄 第5巻 沖縄学の課題』木耳社, 167-202.
- Ivens, W. G. 1931. The Place of Vui and Tamate in the Religion of Mota, *The Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland* 61: 157-166.
- James, K. E. 1991. The Female Presence in Heavenly Places: Myth and Sovereignty in Tonga, *Oceania* 61(4): 287-308.
- Jong, Willemijn de. 1998. *Geschlechtersymmetrie in einer Brautpreisgesellschaft: Die Stoffproduzentinnen der Lio in Indonesien*. Berlin: Dietrich Reimer Verlag.
- 馬淵 悟. 1976. 「台湾海岸 'Ami 族調査報告 I」『歴史と構造』5: 11-32.
- 馬淵東一. 1974. 『馬淵東一著作集 第三巻』社会思想社.
- Ortner, Sherry B. 1981. Gender and Sexuality in Hierarchical Societies: The Case of Polynesia and Some Comparative Implications. In S. B. Ortner and H. Whitehead eds., *Sexual Meanings*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 359-409.
- 大島健彦. 1992. 『道祖神と地蔵』三弥井書店.

- Perlas, Christian. 1996. *The Bugis*. Cambridge, Mass.: Blackwell.
- Rasi Wangge, Pius. 1946. Ola Garé Téi leka Ngé Wa'u Pius Rasi Wangge. Unpublished Manuscript.
- Sahlins, Marshall. 1958. *Social Stratification in Polynesia*. Seattle: University of Washington Press.
- _____. 1981. The Stranger-king or Dumézil among the Fijians, *The Journal of Pacific History* 16(3): 107-132.
- _____. 2008. The Stranger-king or, Elementary Forms of the Politics of Life, *Indonesia and the Malay World* 36: 177-199.
- 佐喜眞興英. 1922. 『南島説話』郷土研究社.
- Sareng Orinbao, P. (Pater Piet Petu SVD). 1974. Peranan Religi dan Magi dalam Pertanian Tradisional Suku Bangsa Lio. Seminari Agung. Ledalero, Flores, (mimeographed).
- _____. 1982. Tenunan Ikat Flores: Ditinjau dari Segi Dualisme dengan Nilai Real dan Nilai Religio-Magi. Seminari Agung, Ledalero, Flores, (mimeographed).
- Suchtelen, Jhr. B. C. C. M. M. van. 1921. *Endeh (Flores)*. Mededeelingen van het Bureau voor de Bestuurszaken der Buitenbezittingen, bewerkt door het Encyclopaedisch Bureau, afl. 26. Weltevreden: N. V. Uitgev.-Mij Papyrus.
- Sugishima, Takashi. 1994. Double Descent, Alliance, and Botanical Metaphors among the Lionese of Central Flores, *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 150(1): 146-170.
- 杉島敬志. 1990. 「リオ族における農耕儀礼の記述と解釈」『国立民族学博物館研究報告』15(3): 573-846.
- _____. 2014. 「東インドネシアにおける狡知と暴力を理解するための複ゲーム状況論」杉島敬志編『複ゲーム状況の人類学—東南アジアにおける構想と実践』風響社, 331-364.
- 臺北帝國大學土俗・人種學研究室調査. 1935. 『臺灣高砂族系統所屬の研究』刀江書院.
- Vatter, Earnest. 1932. *Ata Kiwan: unbekannte Bergvölker im tropischen Holland*. Leipzig: Bibliographisches Institut AG.
- Wurm, S. A. and Shirô Hattori eds. 1981-1983. *Language Atlas of the Pacific Area*, Pt. 1. Canberra: Australian Academy of the Humanities in Collaboration with the Japan Academy.
- 山口昌男. 1983. 「家屋を読む—リオ族（インドネシア・フローレス島）の社会構造と宇宙観」『社会人類学年報』9: 1-28.
- Yamaguchi, Masao. 1989. Nai Kéu, a Ritual of the Lio of Central Flores: Social Structure, House Form and Cosmology, *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 145(4): 478-489.
- 山下欣一. 2003. 『南島民間神話の研究』第一書房.